

ラストイチャダイ

五代友厚シンポジウム報告集

— 開拓使官有物払い下げ説を問う —



大阪市立大学同窓会
五代友厚記念事業委員会

目次

「ラストイチャダイ 五代友厚シンポジウム—開拓使官有物払い下げ説を問う」開催趣旨説明 五代友厚記念事業委員会 委員長 児玉 隆夫	1
---	---

第 I 部

「ラストイチャダイ 五代友厚シンポジウム—開拓使官有物払い下げ説を問う」開催要項	2
Dean Fujiokaさまからのビデオメッセージ	3
住友史料館研究顧問 末岡照啓先生報告 五代友厚と北海道開拓使事件の再検討	4
八木孝昌先生報告 二段構えの五代友厚悪徳商人説	12
原口 泉先生報告 「五代友厚と私」近代史研究者として鹿児島からの報告	16
松田忠大 部長 Zoom 鹿児島大学からの報告	20
薩摩藩英国留学生記念館 長崎 崇 館長	20
天王寺商業同窓会 山田庸男 会長	21
五代友厚研究会 片山翔太 代表	21
パネラー最終意見と田頭鹿児島大学副学長発言	22
原口 泉先生 シンポジウムまとめ	24
「五代友厚シンポジウム」声明	25
五代友厚シンポジウム 謝辞 荒川哲男（大阪市立大学学長）	26
写真集	27

第 II 部

東京書籍・高校日本史教科書関連 教科書会社宛文書	28
岩波書店・歴史学研究会宛文書	30
東京書籍・高校日本史教科書関連 教科書会社宛経過報告文書	32
文科省宛報告文書	34
署名用紙	35
編集後記	36

「ラストイチャダイ 五代友厚シンポジウム—開拓使官有物払い下げ説を問う」 開催趣旨説明



五代友厚記念事業委員会
委員長 児玉 隆夫

今回のシンポジウムと教科書記述の見直しを求める運動は五代友厚記念事業委員会が大阪市立大学として行う最後の事業となりました。ここに至るこれまでの活動を振り返ってみます。

大阪市立大学同窓会が開学の祖五代友厚生誕180周年を記念して杉本キャンパスに銅像を建立したのは2016年3月のことでした。除幕式には当時NHKの朝ドラ「あさが来た」で五代友厚役を演じたディーン・フジオカ氏にもご参加いただきました。また、記念講演は原口泉先生にお願いしました。銅像はその後も一定の注目を浴びてはいましたが、五代友厚の人物・業績について知る人はほとんどいませんでした。若い世代では高等学校の日本史で教えられている五代政商説による悪い印象のみとっていい位でした。また、それまでの伝記では明らかに誤り伝えられていることも散見されました。

そこで委員会は、五代友厚について正しくそして広く知ってもらうために、史実に基づく伝記出版を計画し、その執筆を八木孝昌氏に依頼しました。八木氏は末岡照啓氏の先行研究も参考にして、可能な限りこれまでの誤伝を正した『新・五代友厚伝』を2020年9月にPHP研究所より世に出しました。この伝記は五代についてのこれまでの印象を一新し、私たちの活動を次の新しい段階へ動かししました。即ち教科書記述の見直しを求める運動です。紙幅の関係で詳述は本報告書の第Ⅱ部に譲りますが、新聞の誤報に基づく謬説が教科書に記載され、それによって教えられている限り、五代政商説の汚名を雪ぐことはできません。伝記では史実に基づいて五代が無実であることが示されています。

第Ⅰ部のシンポジウムは上述の3名の方の講演を中心に構成されています。ここでは五代無実を裏付けるさらに新しい事実が明らかにされました。また、ディーン・フジオカ氏からはビデオメッセージが寄せられました。

第Ⅱ部には教科書記述の見直しを求める運動が纏められています。私たちは今後も教科書が改訂されるたびに、北海道開拓使官有物払い下げ問題がどのように記述されるかを注視して参ります。

大阪の恩人と言われた五代が今ほとんど忘れ去られてしまっています。五代政商説の汚名が雪がれ、彼の残した多くの業績が正当に評価される日が来ることを願っています。



「ラストイチャダイ 五代友厚シンポジウム—開拓使官有物払い下げ説を問う」

開催要項

日 程：令和4年1月22日（土）13：00～16：40（開場12：30）

会 場：大阪市立大学本館地区内 田中記念館ホール（JR阪和線 杉本町駅下車）

※ホール前ホワイエにて、五代友厚パネル・学生活動報告パネル等展示

主 催：大阪市立大学同窓会・大阪市立大学

後 援：大阪市立大学教育後援会

方 法：対面方式（150名）・オンライン（100名）※大学・同窓会HP、メルマガにて募集

開会挨拶：児玉隆夫（大阪市立大学同窓会五代友厚記念事業委員会委員長）

コーディネイタ：八木孝昌（大阪市立大学同窓会五代委員会委員（『新・五代友厚伝』筆者）

発 表 者：末岡照啓（住友史料館研究顧問（開拓使官有物払い下げ事件の五代無実を論証した

2010年発表論文「『開拓使官有物払い下げ事件』再考」の著者）

原口 泉（志學館大学教授（鹿児島大学名誉教授）

八木孝昌（大阪市立大学同窓会五代友厚記念事業委員会委員（『新・五代友厚伝』筆者）

活動報告：松田忠大（鹿児島大学法文学部部長）

長崎 崇（薩摩藩英国留学生記念館館長）

山田庸男（天商同窓会会長） 片山翔太（『五代友厚研究会代表』、法2）

声明発表：大阪市立大学 学生団体五代友厚研究会 橋本美沙紀（商3）、中居拓海（商1）

閉会挨拶：荒川哲男（大阪市立大学学長）

司会：SHK（市大放送研究会）

担 当	内 容	時間	時 刻
	映像で薩摩藩英国留学生記念館、学生活動紹介		12：30～13：00
児玉隆夫	主催者による開催趣旨説明	5分	13：00～13：05
八木孝昌	パネリスト紹介	5分	13：05～13：10
著名人	ビデオ・メッセージ	5分	13：10～13：15
末岡照啓	基調報告「五代友厚と北海道開拓使事件の再検討」	60分	13：15～14：15
休憩（学生活動報告：視覚文化資源論実習）		15分	14：15～14：30
八木孝昌	「二段構えの五代悪徳商人説批判」	25分	14：30～14：55
原口 泉	「五代友厚と私」近代史研究者として鹿児島からの報告	25分	14：55～15：20
松田忠大（Zoom）	鹿児島大学からの報告	10分	15：20～15：30
長崎 崇（Zoom）	薩摩藩英国留学生記念館からの報告	5分	15：30～15：35
山田庸男	天商同窓会からの報告	5分	15：35～15：40
片山翔太	学生団体「五代友厚研究会」からの報告	5分	15：40～15：45
コーディネイタから各発言者、会場参加者に最終意見要請（各5分）		25分	15：45～16：10
原口 泉	シンポジウムのまとめ	20分	16：10～16：30
橋本美沙紀 中居拓海	学生によるシンポジウム声明文読み上げ	5分	16：30～16：35
荒川哲男	閉会挨拶	5分	16：35～16：40

Dean Fujiokaさまからのビデオメッセージ

NHKの朝ドラ『朝が来た』、大河ドラマ『晴天を衝け』で、二度、五代友厚役を演じられ、また、2016年3月に大阪市立大学五代友厚公銅像除幕式にも参列いただいた関係から、Dean Fujiokaさまより、五代友厚シンポジウムへのメッセージビデオをいただきました。

シンポジウム当日、会場内のスクリーンでディーンさんが作詞作曲された『Hiragana』をBGMに皆様にお届けしました。



※QRコードからDean Fujiokaさまからのメッセージを視聴いただけます。

ビデオメッセージの内容は以下の通り。

大阪市立大学、鹿児島大学の皆さん、そしてこの動画をご覧の皆さん、「こんにちは、Dean Fujiokaです。」

本日は「五代友厚シンポジウム」の開催、おめでとうございます。大阪市立大学の皆様、そして鹿児島大学の皆様が五代さんの残した功績やその思想をより広く、より多くの人に知ってもらう為に様々な活動をされているとお聞きしました。五代さんは「大阪の恩人」とよく言われますが、自分にとっても五代さんは恩人のような存在です。それまで縁が遠のいていた母国日本に、自分を本当の意味で帰国するきっかけを作ってくれた存在、そんな五代さんを二度演じさせていただく事で、その思想を深く掘り下げていくうちに、五代さんが「夢枕に立つ」というような不思議な初めての体験もしました。

「Hiragana」という楽曲を作った時のことですが、まさに「君はこの曲を作りなさい」というような啓示を受け、明治の諸先輩方が未来に対してどんな夢を描いて後世の私たちに託したのか？そういう情感を表現させていただきました。表現の方法は違えど、本日お集まりの皆様と同じ思いを有する者の一人として「五代友厚研究会」の今後の更なるご発展を祈念しております。

本日はお声がけいただき、本当にありがとうございました。

以上、Dean Fujiokaでした。

住友史料館研究顧問 末岡照啓先生報告

五代友厚と北海道開拓使事件の再検討



はじめに一大阪市立大学と住友一

ただいまご紹介に預かりました末岡でございます。

本日は大阪市立大学同窓会主催の五代友厚講演会にお招きいただき、本当にありがたく光栄に存じます。

さて、大阪市立大学と住友の関係ですが、それは大阪市大の創立期にさかのぼります。本日、会場の入口で拝見した大阪市大の同窓会誌『有恒』22号（2021年）の表紙に、伊庭貞剛（いば・ていごう）の大阪市石山にある旧邸「活機園」（現、住友活機園、重要文化財）が掲載されていました。実は、住友2代目総理事（経営トップ）の伊庭貞剛は、大阪市大の前身である大阪商業講習所が創立されるときに、住友家の代理として創立に関与し、2代目校長、初代同窓会長となった人物だからです。明治22年10月、伊庭校長は3回目の卒業生を送る祝辞のなかで、これからの日本の発展に商業は大切であり、商法に基づいて実施することを説いています。伊庭は裁判官であった経験から商法の重要性を説いたのですが、明治12年（1879）に伊庭を住友にスカウトしたのが、叔父の広瀬宰平でした。

広瀬宰平は、明治10年（1877）に住友家から経営全権を委任されて、住友初代総理事となりますが、それ

までは住友の基幹事業であった愛媛県の別子銅山に勤務し、支配人まで昇進した人物です。同年以降、広瀬宰平は五代友厚のブレーンとして、大阪株式取引所、大阪商法会議所、大阪製銅会社、関西貿易社などを設立し、五代が大阪商法会議所の会頭になると、広瀬は副会頭となりました。

広瀬宰平あて五代友厚弁明書の発見

昭和55年（1980）、住友修史室に勤務して2年目の私は、別子銅山の研究をするために愛媛県新居浜市の広瀬邸（現、旧広瀬邸・広瀬歴史記念館）に出張しました。大量の古文書の中から明治14年（1881）9月7日に五代友厚が広瀬宰平にあてた、開拓使官有物払い下げ事件に対する弁明書を発見したのです。

開拓使官有物払い下げ事件と言うのは、現在の日本史の高校教科書にはほとんど全て載っています。どう書いてあるかという、五代友厚が同じ薩摩藩出身である開拓使の黒田清隆長官と組んで、開拓使の工場・牧場・船舶などの官有物を安価に払い下げてもらい、私利を得た政商だと書いてあるのです。私も学生時代そういう風に習っていましたから、住友修史室に入って、上司から「五代友厚をどう思うか」と聞かれると、「政商の五代さんですか？」と答えたら、「君は何を言うんだ、大阪では恩人なんだよ」と、怒られたことを思い出します。

戦前の昭和18年（1943）に作家の織田作之助が『大阪の指導者』というタイトルで五代友厚の評伝を書きましたが、そのなかで「友厚は力を出し、新知識を注ぎ、才幹を傾けて大阪の更正を図らうとしたのである」とあります。まさに「東の渋沢、西の五代」と称すべき、日本の商工業発達の恩人だったのです。大阪では、そう認識されているのですが、日本史の高校教科書によって日本人のほとんどが、日本近代化の功労者ではなく、「政商の五代」と、インプットされているのです。ところが、どうでしょう。新居浜の広瀬家で発見した五代の弁明書には「青天白日、毫モ天地ニ愧（は）チス」と、無実を叫んでおり、いたく私の心に突き刺さりました。やはり、教科書はまちがっているのだ。これはなんとかしなければならぬと決意し、五代友厚

の研究をスタートさせる契機になったことを思い出します。

誤報にはじまる開拓使官有物払い下げ事件

そもそも五代友厚の冤罪の始まりが新聞報道なのです。明治14年の7月26日から3日間にわたり、「東京横浜毎日新聞」が疑惑の報道を開始したのですが、明治時代の新聞は、現在の新聞とは違い政党新聞なのです。政治運動を広めたいがために、事実に基づかないプロパガンダ（宣伝）の記事が多いのです。宣伝新聞ですから、信用できない部分があるということを認識して下さい。

ところが、昭和29年（1954）に大久保利謙先生（明治維新の三傑、大久保利通の令孫）が、「明治14年の政変」という論文を発表し、次のように述べています。

「開拓使は、この年（明治十四年）、予定の存置期間の一〇ヶ年を経過したので存廃問題がおこっていた。長官の黒田清隆は、政府の官営工場払下政策の線に添って、一〇ヶ年間に政府資金一四〇〇万円余を投じた開拓使経営の事業一切を、開拓使大書記官安田定則、同権大書記官折田平内等と薩摩出身の大坂の政商五代友厚と長州出身の中野梧一等が共同して組織した関西貿易商會に僅々三八万円、しかも無利息三〇ヶ年賦という破格の低廉な条件で払下げようとした。これが問題となったのである。」

大久保先生は、「明治十四年の政変」研究の第一人者であり、近代の研究者が開拓使事件を研究するときには、すべてこの論文に依拠しています。そのため、日本史の教科書もこれに倣っているわけです。

開拓使官有物事件と政治利用

それでは、開拓使官有物払下げ事件の舞台となった北海道の開拓について説明したいと思います。明治2年（1869）7月に明治政府は北海道の近代化をめざして開拓使を置きます。当時の北海道は北方からロシア国の脅威があり、軍事防衛上からも近代化を急ぐ必要がありました。明治2年に開拓使ができて、最初の開拓長官は旧佐賀藩主の鍋島閑叟（なべしま・かんそう）でした。同年に公家の東久世通通禱（ひがしくぜ・み

ちとみ）が2代目長官となり、同3年に薩摩の黒田清隆が補佐役の次官となりますが、翌4年に3代目長官に昇進します。

明治3年5月、黒田清隆が開拓次官になると、北海道の近代化を急ぐべしとして10月に政府へ「十月建議」を提出しました。明治4年から明治14年まで10年間、殖産興業と軍備（屯田兵）のため、政府資金を毎年100万円ずつ北海道の投下してほしいというものでした。具体的には、炭鉱・鉄道・船舶・工場・牧場・試験場などの設立・運営資金に回されました。

明治14年は、まさに開拓使事業の終わり、諸事業が民間に払下げの年に当たっていたのです。それで、黒田は何とか開拓事業をそのまま継続したいと考え、五代友厚の関西貿易社に払下げの受け皿会社になってほしいと頼んだのです。新聞報道では五代が了承したことになっていますが、実際は断っています。

それなのになぜ新聞報道は、五代が払下げを了承したとしたのか。それは多分に政治問題が絡んでいます。実は五代と同郷の友人である寺島宗則（外交官）の文書の中に、自由民権運動家の動向を探った「探偵書」があるのですが、山際七司（やまぎわ・しちじ）は、「政府を転覆・革命するのに兵器はいらない、開拓使払下げ一件が利用できる」と述べています。そのため、五代友厚は自由民権運動の恰好の攻撃対象となり、全国の自由民権の演説会で標的となってしまったのです。五代はほんとうに私利私欲を図る人なのでしょうか？ それを考えるためには、五代が生きた幕末・維新期の時代を見る必要があります

五代友厚が生きた時代

五代友厚は、天保6年（1836）に薩摩藩で生まれました。まさに天保の改革が始まる直前の財政難の時代です。この年には、坂本龍馬、松方正義、井上馨、など、明治維新で活躍した華々しい人材がいます。年上には西郷隆盛、大久保利通、大隈重信など、年下には伊藤博文、板垣退助、黒田清隆など、そうそうたる群像の真ん中に位置しています。

当時の日本は、欧米各国から開国を迫られ、植民地になるかもしれないと言う危機感のある時代でした。

嘉永6年（1853）にはペリー艦隊がやって来て、武力で開国を迫り、安政5年（1857）に日本は日米修好条約という不平等条約を結び開国にいたりしました。

そうゆう緊迫の幕末、文久2年（1862）2月に五代友厚は薩摩藩の命令で、武器・汽船を調達するため上海に密航します。五代は上海で中国が植民地になり、人民が虐げられている状況に衝撃をうけます。帰国後の7月には鹿児島で薩英戦争が勃発し、軍艦に乗り込んでいた五代と寺島宗則はイギリスの捕虜となり、横浜で解放されました。

五代は欧米列強と対峙するためには、留学生を派遣しなければならないと、薩摩藩主に上申し、慶応元年（1865）に薩摩藩の留学生19人を引き連れて、ヨーロッパに旅立ちました。その中には、東京開成学校（東大の前身）校長の畠山義成、開拓使札幌麦酒の責任者の村橋久成、工部省生野鉦山長の朝倉盛明、初代文部大臣の森有礼（もり・ありのり）、米国特命全権大使の吉田清成など、そうそうたる人材が巣立っていきました。一方、五代はフランスで、軍艦・鉄砲・紡績機械などを仕入れて帰国するわけです。これによって、薩摩藩は明治維新に活躍することができたのです。五代友厚は、将来を見据えた先見性のある人物でした。

五代友厚と国益論

明治新政府は、五代友厚のような人材を放っておきません。明治元年（1868）1月に御前会議に列席できる参与となり、大阪で外交官トップ外国事務掛に就任しました。当時の日本は安政の不平等条約によって、関税の税率を決める自主権も、外国人を裁判にかける領事裁判権もありませんでした。そのため、外国商人に貿易の権利を牛耳られ、内心忸怩たる思いでした。役人としての限界を感じた五代は、自らが商人となってこの難関を切り開いていこうと決意し、明治2年7月に大阪で商人になりました。これは、なかなか普通の人間にはできないことです。本当だったら高位高官の大臣にもなれるような人が、いきなり民間人になるのですから。五代は民間人になって、大阪の商人（あきんど）を育てようとしたのです。自分の利益だけではなくて、日本の国益を考える人材を育てたいと思っ

たのです。それが、大阪商法会議所であり、その人材を育成する学校が皆さんの大阪商業講習所（大阪市立大学の前身）なのです。これは大英断でした。

明治10年（1877）に五代友厚にとって大事件が起こります。西郷隆盛が故郷の鹿児島で私学校の生徒に担がれて反政府の挙兵をおこなったのです。西南戦争は、近代日本の最大の内乱であり、明治新政府はその存立基盤をかけてこの内乱を平定しました。しかし、戦費調達のために、現金の裏付けのない不換紙幣を大量に発行したため、紙幣価値が下がり、物価が上昇するという未曾有のインフレにおちいりました。明治13年に五代は、物価安定策として「米納論」、財政救済策として「財政救済意見」を政府に提出します。

また、五代は同郷の後輩である前田正名の「直貿易論」にも賛同し、外国商社に牛耳られた貿易権益を日本人の手に取り戻そうとしました。すなわち、当時の日本の貿易は、日本商人が直接外国に輸出するわけではなく、横浜や神戸・大阪川口にある外国商館との取引をする商館取引でした。そのため、外国商館に手数料など貿易の利益を外国商館に持っていかれていました。そこで、前田正名の意見に賛同し、直接アメリカやヨーロッパに日本商社の支店を作って、日本の産物を直接輸出入しようと考えたのです。これが、「直貿易論」です。

五代と関西貿易社の設立

五代は前田正名の直貿易論によって、国を富ますためにはどうしても貿易商社が必要であると決意し、関西で貿易会社を設立しようと思いました。当時、日本の貿易会社は、北海道の海産物を一手に請け負った広業商会、九州の三池炭鉦の石炭を輸出していた三井物産など七つほどありました。いずれも関東以北に偏っていたからです。

そこで、明治14年6月3日に大阪の豪商を説得して関西貿易社を設立するわけです。関西貿易社の目的は何かということ、日本の産物を欧米各国やアジア各国に輸出することを目的にしていました。当面は中国への輸出で利益を得られるようにし、北海道の海産物・石炭・木材・農作物などをターゲットにしていました。

五代は、江戸時代の大阪が天下の台所として、北回り航路で、北海道から日本海・瀬戸内海経由で直結し、中国向けの昆布・干シアワビなどの海産物や、ニシン粕などの魚肥が入荷していたことを知っていたからです。

明治13年10月頃に五代友厚は貿易会社（関西貿易となるのは翌年6月）の設立を決意します。大隈重信にこのことを報告すると、財政と国益のためにたいへん役立つと喜んでくれました。五代友厚の本邸は西区鞠（うつぼ）北通（現在の大阪科学技術センター）にありましたが、貿易会社の発起人会は、同年11月3日に五代の中之島別邸（現在の日本銀行大阪支店）で開催されました。五代は大阪の豪商20人あまりを集め、国家財政を救うために関西貿易社を創設すると演説します。すると、大阪の豪商達は全会一致で賛同し、五代に設立手続きを一任します。同年11月25日に五代は、政府要人と会談するために上京しました。

翌14年1月には、伊藤博文・井上馨・大隈重信・黒田清隆らが熱海に集まって「熱海会議」が開催されます。その目的は、明治維新の三傑である西郷隆盛・木戸孝允・大久保利通が相次いで、西南戦争で自刃、病没、紀尾井坂で暗殺と非業の死を遂げたので、伊藤・大隈による政権の主導権争いでした。具体的には、伊藤・井上は、筆頭参議となった大隈の権限を削ぎ、北海道で権力をふるう黒田の開拓長官辞任を求めるものでした。五代は、維新三傑の没後に大隈の活躍を期待しましたが、伊藤の後塵を拝し、優柔不断な態度に叱咤激励をしています。しかし、黒田は開拓長官の辞任を拒み、その渦中に五代が、前田正名と共に貿易商社設立の請願をするなど混雑し、伊藤の思惑は外れてしまいました。

明治14年3月25日にいたり、五代は開拓使の安田定則（旧薩摩藩士）・調所広丈（旧薩摩藩士）・西村貞陽（旧佐賀藩士）から貿易商社への協力を取り付けました。同年4月12日に関西貿易社の設立発起人会が開催され、資本金100万円で欧米・アジア各国への貿易をおこなうと採択されました。19日には設立総会が開催され、5月に創立証書と定款が制定され、6月3日に関西貿易社が設立されました。

五代友厚の払下げ拒否

明治13年11月に政府は「工場払下げ概則」を制定しましたが、払下げ条件が厳しかったために払下げを申請するものは皆無でした。開拓使官有物の民間払下げも決定していたので、黒田長官は太政大臣の三条実美から払下げ案の提出を急ぐよう督促されていましたが、黒田は官有物の査定に手間取り、明治14年6月に延期願を提出しています。

まさに、明治14年6月、黒田は北海道の開拓使役人を東京の開拓使物産取扱所に集め、払下げについて相談します。五代も関西貿易社の監督部会（役員会）から払下げ案件を一任され、役員会の決議を持って東京の開拓使会議に出席することになりました。この協議内容が重要なのです。これまで、この会議が五代と黒田ら開拓使の役人が結託した温床とみられ、新聞報道にリークされたのです。

ところが、明治14年の6月中旬に丸山作楽が佐佐木高行（天皇側近の侍補）に語った談話（『保古飛呂比（ほごひろい）』東京大学出版会）によると、実際の新聞報道とずいぶん違うのです。丸山作楽は元々、開拓使の役人で樺太の領有問題で活躍しましたが、明治4年の外務省時代に征韓論で政治犯として収監されました。明治13年に赦免されると、福地源一郎と共に立憲帝政党を立ち上げ、元老院議員・貴族院議員を歴任した人物です。丸山によると、黒田清隆（開拓長官）と山田顕義（参議）を訪ねて、開拓使事件を質問したところ、世間の新聞報道とはずいぶん違うというのです。開拓使官有物の払下げは、五代が希望したのではなく、黒田から五代に関西貿易社で引き受けてくれと依頼されたのが真実でした。ところが、五代は関西貿易社の目的にも合わないし、採算も取れないので断ったというのです。さらに、大隈重信からも5～6年は利益がないかもしれないが、関西貿易社には豪商が多いので、協力してぜひやってくれと説諭されたが、五代はこれも取り合わなかったのです。

五代は実業家です。関西貿易会社の代表として役員会決議を持参して、黒田や開拓使の役人と交渉しているのです。役員会や株主の意向に背いて赤字を出すような事業には進出できないわけです。ここでハッキリ

と五代は断っているのです。すると、黒田は困ってしまいました。黒田は開拓使十か年計画の提案者であり、明治天皇にも事業を継続したいと上奏した手前、ここで引き下がることはできませんでした。太政大臣の三条実美からも払下げ案の提出を督促されているので、自分たち開拓使でやるしかないと腹をくくったようです。

北海社の設立

黒田長官は、東京の開拓使物産取扱所に開拓使の幹部を集めていましたから、その幹部に会社を作らせて、受け皿会社にすることにしました。その幹部というのが、安田定則（薩摩藩出身、東京物産取扱所所長）・折田平内（薩摩藩出身、根室支庁長）・鈴木大亮（仙台藩出身、札幌本庁の書記官）・金井信之（兵庫県出身、東京物産取扱所の書記官）の4人でした。明治14年7月21日に黒田長官はようやく払下げ伺を三条太政大臣に提出しましたが、そのなかで、「今此輩ニ説諭シ、官ヲ解キ一社ヲ団結セシメ、別記ノ方法ヲ以テ工場其他ヲ払下、従前当使ノ計画ヲ継続セシメ」（「工場其他払下処分ノ儀ニ付伺」）とあります。開拓使の官吏が民間人となって一社を作り、この会社に払下げするということです。

ところが、三条太政大臣が明治天皇に裁可を仰ぐと、天皇から役人の会社で大丈夫か、と懸念が伝えられたので、黒田は安田・平田・鈴木・金井の4人から誓約の内願書をとっていることを報告します。それには、自分たち4人は一社を設立し、払下げの裁許が得られたら、すみやかに会社組織の細則を作ってお見せしますという約束でした。これにより、8月1日に払下げの通達が出されました。7月30日に天皇の北海道行幸があり、大隈重信ら重臣がこれに随行しました。札幌では天皇を迎えるために洋館の「豊平館」を建築し、これは現在も残っています。8月7日に黒田清隆は、よほど心配だったのか安田・平田・鈴木・金井の4人に戒めの手紙（黒田内諭）を書いています。それには裁許に到る経緯が詳細に記されていました。これを意識してお話ししましょう。

「御前会議で、天皇から三条太政大臣に、この4名

の者でこの事業を負担できるのか、また4人の議論が合わず互いに不和となって失敗する憂いはないのかと内論があった。そこで、清隆は三条大臣に君たち4人の決意と履歴、事業の負担に耐えると誓約した内願書を天皇に上奏した。すると、横浜毎日新聞や郵便報知新聞などが、事実齟齬のことを論評し、誹謗中傷を憶測で広めてしまった。ところが、天皇はこれに惑わされることなく、聴許してくださった。今回の払下げ事業というのは、一般の一商社・一工場のように私利を得るために設立したのではない。開拓使の意志を継続し、物産を盛大にして国益を拡張することが目的である。万一蹉跌（間違い）が生じ、失敗したならば、清隆は天皇陛下に顔向けができない。このことを意に止めて日夜奮闘してほしい。」

黒田はよほど心配だったことがわかります。そこで、安田ら4人が設立したのが北海社です。北海社の創立証書と定款が五代友厚文書に残っていました。これによると、まず、会社名は北海社とし、東京日本橋箱崎に置くとあります。開拓使の物産取扱所が本社の予定地でした。この建物は、のちに最初の日本銀行本店となります。次に事業の目的は、政府から払下げられた物件の運営でした。大まかに分けるとつぎのようになります。

- ①東京・大阪・敦賀・小樽・函館の事務所と倉庫
- ②札幌の諸工場（札幌麦酒醸造所、同葡萄酒醸造所）
- ③札幌の牧場と植物園（札幌牧羊場、札幌桑園・蚕室、札幌葎草園）
- ④真駒内牧牛場・新冠牧馬場
- ⑤根室の諸工場と牧場（別海鑛詰所、厚岸鑛詰所、根室牧牛馬場）
- ⑥択捉の獵虎（ラッコ）獵場
- ⑦船舶（玄武丸・函館丸・矯龍丸・乗風丸・清風丸・西別丸）

これらの払下げ金額は38万7082円でしたが、船舶は評価額が約55%と一番良かったのです。ついで、東京・大阪・小樽・函館・敦賀にある事務所と倉庫が約20%、残り25%が諸工場や牧場・植物園でした。諸工場や牧場などは物件数は多いのですが、赤字経営により評価額が低かったようです。

新聞報道の検証

次に開拓使の払下げに関する新聞報道の検証に移りたいと思います。明治14年7月26日から3日間、「関西貿易商会ノ近状」と報じた東京横浜毎日新聞は、沼間守一（ぬま・もりかず）が発行した新聞です。沼間は政府の役人から自由民権運動に専念するため下野し、自由党・立憲改進黨の設立に関与した人物です。ですから、沼間の目的ははっきりしています。政権批判に使えるものは何でも使ってやろうという思惑です。最初の7月26日の記事を読むと、黒田が稟議した官有物の種類、評価額、払下げ金額、どの一つも正確に把握せず、断片的な情報によって論を立て、あたかも薩摩出身の黒田長官が、同郷の五代が主宰する関西貿易社に払下げたと断定しています。その意図するところは、薩長藩閥政治を批判に利用したということです。

また、いたるところに「その報道者いわく」から始まる伝聞記事があり、「関西貿易社が500万円の資金を政府から借用し、大阪において一大商社会の設立を企画したが、政府の許可が得られなかったため、北海道の開拓使と約束して、その産物を一手に引き受けようとした」などと、およそ事実でないことを掲載しています。関西貿易社は、すでに述べてきましたように、直貿易を目的に大阪財界で設立された株式会社であり、政府資金の導入に失敗したから、開拓使と組んだなどとは、とんでもない言いがかりです。本当に、無責任な報道ですね。

東京横浜毎日新聞の記事は、明治14年8月8日の東京曙新聞、9月6日の朝野新聞で否定されます。8月8日の東京曙新聞では、「関西貿易商会が開拓使と締結して払下げてもらったのではない。開拓使の2、3の官吏が開拓使の廃止を知り、その利益あるものを払下げてもらい、北海道の商権を把握しようと企てたものである」と掲載しています。9月6日の朝野新聞にいたっては、黒田が三条太政大臣に提出した払下げ稟議書の全文を転載し、払下げが開拓使の官吏が辞職後に設立する会社であることを白日の下に晒しました。また、10月7日に京都府知事の北垣国道は、かつて開拓使に勤務していた経験から、開拓使の役人の非を責

め、「広く有志者に公売するか、開拓使廃止後の新県に引きつぐべきである」と、三条太政大臣に建白しています。

いずれも、東京横浜毎日新聞の誤報を否定しているわけですから、本来ならば誤報の連鎖は断ち切られていたはずですが、政治運動と連動したために、現在までずっと続いているのです。この連鎖はどこかで断ち切らないといけないわけです。ところが、高校の日本史教科書に書き継がれているわけですから、証拠を示して否定するしかありません。

北海社と関西貿易社の合併文書の検証

これまでの経緯から、官有物払下げの受け皿会社が関西貿易社ではなく、開拓使の役人が設立した北海社であることは明白になりましたが、北海社は関西貿易社のダミー会社で、いずれ両社は合併するのではないかとの説もあります。それを裏付けた史料が五代友厚文書のなかにあり、平成2年（1990）に刊行された『函館市史』で活字化されました。ところが、原文書を見ると、「甲乙ノ両社合併ノ実際ヲ深案考思スル」とあり、会社名も差出も宛名もない、ただの走り書きの草案です。しかも、いたるところに訂正の跡があり、読めない部分もあります。『函館市史』で活字化されると、訂正部分を原文通りに翻刻していませんから、あたかも正式な合併契約書のように見えてしまうのです。私から見ると、走り書きのメモにすぎません。しかも、作成したのは五代ではなくて、開拓使の役人です。それは、「開拓使が廃止されると、従事していた者が無益となり、軽々に廢人（クビ）にするのは忍びない」とあるからです。

企画内容を見ると、甲社（北海社）は開拓使の継続会社として設立するものであり、船舶・諸税品一切、将来見込みある官有物2、3点の払下げ、乙社（関西貿易）は貿易拡張を目的とし、岩内炭坑・幌内石炭・鱒岳詰所・山林の払下げとあります。実際の払下げ物件と比較すると、北海社は不採算部門も含めて多めに払下げを受け、関西貿易社は岩内炭坑と厚岸山林の2件を希望したにすぎません。この合併企画書草案は、事業の先行きに不安を感じていた開拓使側が、もしも

のときに、大阪財界をバックとした関西貿易社に援助を求めするために作成したものと考えられます。

また、払下げ価格については、新聞は事業費1400万円投下したものをわずか38万7082円の30か年賦と破格の安い値段と報道しましたが、皆さんどうでしょうか？赤字を垂れ流した不採算の事業ですよ。誰が引き受けるでしょうか。実際に五代は断っていますし、政府の「工場払下げ概則」で申請したものは皆無でした。明治18年に北海道庁が設立されると、初代長官の岩村通俊は、不慣れな役人が官業を経営することは、経済の原理に背き、不採算になるので、民業に移すと宣言しました。この年、「工場払下げ概則」が廃止されて、きびしい条件が撤廃されましたが、五代のときに断行して、関西貿易社のような純粋の民間会社に払下げていれば、その後の5年間に税金の垂れ流しはなかったと考えられるのです。

五代友厚の弁明書

明治14年8月31日に関西貿易社副総監の広瀬幸平は、五代友厚に払下げ問題について意見書を提出します。これは、養子の五代龍作が友厚の無実を証明するために『五代友厚伝』に収録しました。広瀬は五代友厚にたいし、「現在、北海社と関西貿易社が関係ないことは明白であるけれども、将来北海社と連絡を通じ、互いに協力することになれば、世間の論者はどういふだろうか、果たして結託していたと言われるかもしれない、このさい北海道の事業からすべて手を引くべきである（意識）」と、忠告しています。それは、五代が世間の攻撃論者から誤解によって命を狙われており、五代の身の安全を第一と考えた老婆心からでした。

9月7日、五代は広瀬の意見書にたいし、「払下げを受けた安田・折田・鈴木・金井の4名は、北海社という一社を設置し、黒田長官が北海道へ出発する前の8月7日に、この4人に与えた黒田論達がある」と述べ、北海社が実在する会社であることを証明しています。また、北海社の出願から認可までの経緯は、10月5日の郵便報知新聞、同月6日の朝野新聞にも掲載されており、黒田長官も関西貿易社への払下げは事実無根と断言したので、北海社と関西貿易社が別会社であ

ることは理解してもらえらるだろうと述べています。しかも、弁明書の最後には「青天白日、毫も天地に愧（は）じず」とのべ、潔白であると断言しています。

ここで疑問に思うのは、それほど五代が潔白と主張するのなら、なぜ新聞報道でそれを公表しなかったのかということです。その答えも五代の弁明書のなかにありますので、これを意識します。

「各新聞紙上では、事実と齟齬する記事によって関西貿易社が激しく攻撃され、私五代にたいしても暗殺するとか、暴力に訴えるとか流布されている。政府はこれを黙ってみているべきではない。政府が黙視しているのは、何か深意があるのでしょうか？もし、これを度外視するのであれば、公然、姓名を明らかにして新聞に反論記事を書くところ、政府要路から決して気にしてくれるな、これをそのまま放置してほしいとの内諭を得たので、私五代は弁明したい思いを断念した。」

五代は、たいへん悔しい心中を信頼する広瀬にだけ吐露したのです。おそらく、ここで五代が、払下げの受け皿会社は関西貿易社ではなくて、開拓使の元役人が設立した会社であると発言したら世間は大問題になりますよね。役人が元役人の会社に払い下げることになったら、これは、民間に払い下げるのとは訳が違うわけです。官と官の癒着が明らかになりますから。それを考えて五代は、自由民権派の攻撃から政権を守るために、自分が罪を負うことを覚悟したものと考えられます。五代は、自分は無罪であるから、いつかは必ず真実が明らかになると確信していました。

黒田の名誉と五代の名誉

それでは、一方の当事者、黒田長官と元部下の役人について、その動向を見ておきたいと思います。実は、明治14年10月12日に大隈の追放および憲法制定・国会開設と引き換えに、開拓使官有物の払下げが中止されると、黒田は10月から11月にかけて新聞社各社を名誉毀損で訴えます。安田ら4人も北海社への払下げの取消撤回と公売を希望しましたが、実現しませんでした。黒田の訴えは、12月27日と28日に判決が下り、新聞・雑誌社すべてが罰金刑に処せられました。12月28日、

黒田は勝訴したことを見届けて、開拓使の長官を辞任しました。ところが、五代はどうでしょう。新聞各社を訴えてしかるべきなのに、政府を守るために沈黙を守り、その非難を一身に浴びたのです。黒田はのちに内閣総理大臣となり、大日本帝国憲法を発布しています。四人の役人はどうなったかという、安田は北海道管理局長、県令を経て貴族院議員、平田は内務省を経て警視総監、鈴木は大蔵省を経て貴族院議員、金井は北海道炭鉱汽船会社の役員になっています。

五代は自分の無実を確信していましたが、明治18年9月25日に49歳の若さで急逝しました。そのため、無実を訴える機会がないどころか、否定しないことを良いことに、新聞社の誤報がそのまま一人歩きし、すべての罪を五代がかぶることになってしまったのです。

おわりに—五代友厚の名誉回復—

実は、五代友厚顕彰の契機となったのが、1970年（昭和45）に大阪で開催された万国博覧会でした。世界から人々を迎える大阪、その発展を担ったのが五代友厚ですから、当然顕彰しようという機運が盛り上がったのです。菅野和太郎先生（通商産業大臣、日本万国博覧会名誉副会長）が「五代友厚顕彰会」を組織し、昭和49年から53年（1974～1978）にかけて、『五代友厚伝記資料』全4巻が日本経済史研究所から刊行されました。原資料は、東京の国立国会図書館の憲政資料室

にあったのですが、この運動によって大阪商工会議所に移管され、五代が活躍した大阪の地で保存されることになったのです。

それから約50年が経ちました。五代友厚の名誉回復は進んだのでしょうか。いまだに、高校の教科書に関西貿易社が払下げの受け皿であるとか、北海社が受け皿会社であったとしても、それは五代のダミー会社であるとか、五代黒幕説が克服できないまま現在に至っています。

五代と言えば、1967年（慶応3）にパリ万博に参加し、日本に殖産興業の種をまきました。来る2025年には大阪・関西万博が開催されます。今年は2022年ですので3年後です。この大阪に世界中から、日本中から人々が集まります。この機会に、今日の商業都市大阪は、いったい誰が作ってくれたのか？ということを含めて、五代友厚の名誉を回復したいと思っております。本日のシンポジウムを開催の意義がここにあると確信し、主催者の大阪市立大学関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

本日はご清聴、どうもありがとうございました。

【付記】詳細については、末岡照啓著『五代友厚と北海道開拓使事件』（ミネルヴァ書房 2022年）をご参照ください。



末岡 照啓 Sueoka Teruaki



（ミネルヴァ書房、2022年7月）

住友史料館副館長を経て、現在、研究顧問。1955年長崎県生まれ。1978年国学院大学文学部史学科卒、住友史料館の前身である住友修史室に勤務。住友の歴史に精通し、『住友の歴史』（共著、思文閣出版）、『住友別子鉱山史』（共著、住友金属鉱山株）、『近世の環境と開発』（共編著、思文閣出版）などの著書がある。論文「『開拓使官有物払い下げ事件』再考—関西貿易社の五代友厚と広瀬幸平を通して」（2010年7月「住友史料館報」第41号）で初めて五代無実を論証。本年7月ミネルヴァ書房より『五代友厚と北海道開拓使事件—明治十四年の大隈追放と五代攻撃の謎に迫る』を上梓。

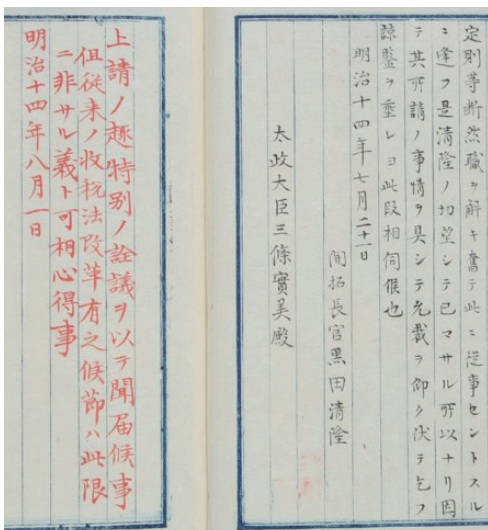
八木孝昌先生報告

二段構えの五代友厚悪徳商人説

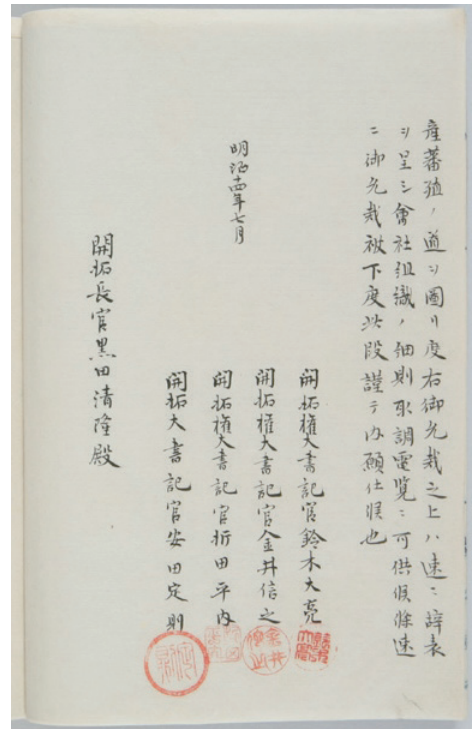


八木) 只今よりシンポジウム後半を始めます。進行をつとめさせていただきます八木でございます。基調報告で末岡先生からは、事件の全容の分析と五代無実について包括的な説明をいただきました。私からは「二段構えの五代悪徳商人説批判」というタイトルで25分間報告いたします。ほとんどの内容は、末岡先生が研究者のお立場から委曲を尽くして報告されましたが、私は二つの異なる五代悪徳商人説の批判を試みます。五代悪徳商人説が厄介なのは、それが二段構えになっているからです。一段目の五代悪徳商人説を批判しても、二段目の五代悪徳商人説は動揺することがなく、そんなことはもうとっくに知ってますよという調子で、自説を展開するという二段構造になっています。

一. 一段目の五代悪徳商人説



開拓長官黒田の太政大臣三條宛「伺」最終ページ



安田定則等の開拓長官黒田宛「内願書」

一段目は、東京横浜毎日新聞が誤報をそのまま受け入れて、政府が官有物一式を五代友厚に払い下げたと書いている。高等学校日本史教科書のどれにも政府が五代に格安で官有物を払下げしようとしたが、反対が起って払下げは中止となった、と書いているのがそれです。この教科書説とまったく同じことを岩波書店『日本史年表』（歴史学研究会編）が書いています。『日本史年表』の2001年第四版も2017年第五版も記述は同一です。平凡社『日本史事典』も、五代の関西貿易商會に38万7千余円、無利息30年年賦は破格の条件で払い下げようとしたが反対が起って中止となった、としています。

実教出版日本史教科書『日本史B』等の高校日本史教科書、岩波書店『日本史年表』、平凡社『日本史事典』が揃って、政府は五代に官有物を払い下げようとしたと記述していますが、それは事実無根のことです。黒田清隆開拓長官が三條実美太政大臣に宛てた開拓使官有物払下げ申請した長い文書が国立公文書館に保管されています。インターネットで「開拓使官有物払下許可及び取り消しの件（明治14年）」で検索すると、冒頭に政府文書の綴りが表示されます。その綴りの最初は黒田長官の申請書「工場其他払下処分ノ儀ニ付伺」

で、そこには五代友厚の名前も五代たちが設立した関西貿易社という貿易会社も一言も出てきません。「開拓使幹部の安田定則たち四名が開拓使を退職して民間会社をつくり、民間に払い下げるべき諸事業を引き受けたいと申し出てきたが、この案はこれまでの開拓使の事業が継承されるとともに、北海道人民の幸福にも寄与するので、彼らに開拓使の事業を一括して払い下げご承認をいただきたい」という趣旨のことが書かれています。

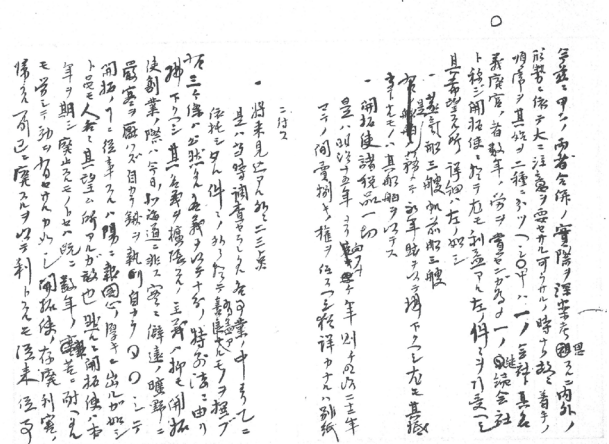
その次には安田定則以下開拓使幹部四人が、自分たちが開拓使を退職して会社を設立するので、そこに「当使工場其他ノ内別記」の物件を払下げていただきたい、という黒田清隆開拓長官宛ての「内願書」が綴じられ、続いて「別記」の開拓使官有物である各地の倉庫地所、船舶、函館・札幌・根室の諸工場の合計24物件の個別の払い下げ金額と合計金額

「三拾八万七千八百貳拾円壹銭七厘」が示された一覧表が置かれます。

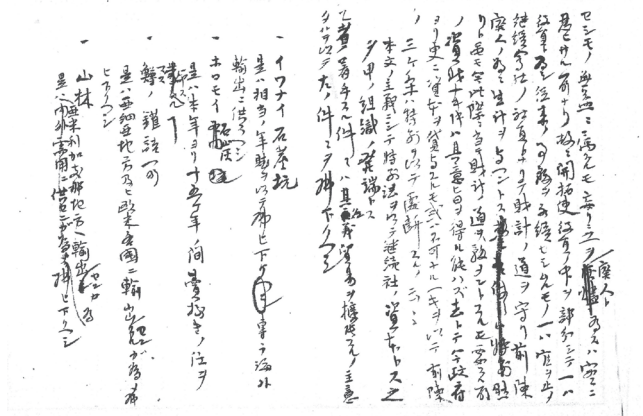
続けて「諸工場其他払下処分之儀」についての政府参議への回覧文書と、「諸工場其他払下処分之事」についての回議文書が置かれ、さらのその次に、「御指令案」として「上請之趣特別ノ詮議ヲ以テ聞届候」という文書が来ます。この文書には赤字で「明治十四年八月一日」の日付が付され、内閣書記官のものと思われる田中の押印があります。

私が概略を説明した以上の政府文書は資料として皆さまにもコピーをお渡ししていますので、ご覧ください。繰り返しますが、これだけ明々白々の証拠があるのに、諸高校日本史教科書・岩波『日本史年表』・平凡社『日本史事典』は新聞の誤報だけを根拠とした「デタラメ」(大河ドラマ「青天を衝け」第35回で伊藤博文が「東京横浜毎日新聞」の誤まった記事に対して発した言葉)を書いているのです。

二. 「開拓使官有物払下に際し継続会社設立一件」



「開拓使官有物払下に際し継続会社設立一件」原文第1ページ



「開拓使官有物払下に際し継続会社設立一件」原文第2ページ

二段目の五代悪徳商人説は、開拓使官有物払い下げを申請したのは五代ではなくて、開拓使幹部4人が設立する北海社であったことを認めます。この説は一段目の説よりも手が込んでいます。五代は払い下げを申請していないけれども、開拓使幹部たちの北海社が申請しておいて、政府が北海社に官有物を払い下げたら、北海社と五代たちの関西貿易社を合併させて、官有物はすべて五代の関西貿易社の手に落ちる計画だった、という説です。

言い換えれば、五代黒幕説です。

この五代黒幕説が根拠とするのが、五代家より見つかった「開拓使官有物払下に際し継続会社設立一件」文書です。現在は大阪商工会議所に保管されています。文書の表題は大阪商工会議所が付したもので、当文書にその表題があるわけではありません。その文書は契

約書ではなくて、明らかに開拓使の誰かが書いたと目されるメモ風の文書です。冒頭にこう書いてあります。「今茲に甲乙の両者合併の實際を深案考思するに、内外の形勢に依て大に注意を要せざる可らざるの時なり。故に着手の順序を其始め二種に分つべし」として、「甲（北海社）」に払い下げるものとして、「蒸気船三帆前船三層」、「開拓使諸税品一切」「将来見込ある外に二、三点」とし、「乙（関西貿易社）」に払い下げるものとして、「イワナイ石炭坑」「ホロモイ石炭坑」「鱒の鱒詰所」「山林」の4物件を挙げています。

私は著書『新・五代友厚伝』の558ページで、「もし黒田が五代に開拓使官有物総体の払い下げを打診していたとすれば」と仮定した上で、「五代は関西貿易社を準備する中心メンバーたちと協議した上で、黒田に対して否定的な回答をしたに違いありません」と書きました。明治14年6月に五代と黒田が東京で会っていることが分かっており、その際に五代は黒田に対して、「関西貿易社が官有物払い下げをまとめて受けることはできない」と断っているはずである、そう考えないと一連の経緯が説明できない、と私は考えたわけです。

五代に断られた黒田は仕方なく開拓使幹部を退職させて、会社を設立させ、そこに官有物を払い下げるという代替案を考えた、というのが私の推測でした。図らずも、このシンポジウムにおいて、私の推測が正しいことが分かりました。先ほどの末岡先生の基調報告で、明治期の政治家佐佐木高行の日記『保古飛呂比』の中から「開拓長官黒田清隆が五代友厚に関西貿易社への官有物払い下げを打診したところ、五代は採算が合わないし、社の目的にも沿わないという理由でそれを断った」旨の記述を末岡先生が発見されたことが報告されました。末岡先生のこの大発見によって、五代に無実は無実と断るところなく論証されたことになったのでした。つまり、五代が官有物払い下げを断っていることからして、北海社と関西貿易社の合併はありえないことになるのです。末岡先生の発見が本邦初というかたちで公開されたことだけでも、本日のシンポジウムは意味があったと言わなければなりません。

開拓使の誰かが書いたと目される「開拓使官有物払下に際し継続会社設立一件」の文書は、ですから開拓

使官有物の一部を関西貿易社に割り当てておいて、将来北海社が事業的に行き詰まったときには、関西貿易社と合併して助けてもらいたい、という主観的願望から、一種の保険をかけるつもりで作成されたと見ることができます。開拓使の役人たちは公的予算が保障される条件のもとに開拓使事業を進めてきたのですから、その諸事業を民間会社で受けて経営が成り立つかどうかにははなはだ不安なところがあったはずです。そういう事情の中で当文書がメモ風に作成されて、「こんなことを考えているのですが」という趣旨で五代に渡され、それが五代家に残った、とするのがこの文書についての最も蓋然性の高い理解となります。

現に黒田長官は政府が北海社への払い下げを決定したあとの8月7日付の安田定則等4名も開拓使幹部への書状で、「此等の（払い下げの）事業は、其一、二を除くの外は、率ね皆三、五年を経過せざれば、収支相償ふに至らず」と述べて、事業の採算性がきびしいことを伝えています。

三. 二段目の五代悪徳商人説

ところが、この「開拓使官有物払下に際し継続会社設立一件」文書をもって、吉川弘文館『国史大辞典』に、「払い下げを出願したのは、開拓使の大書記官・権大書記官らで、(中略)かれらの背後には、北海道物産の移・輸出を営業目的にかかげて結成された関西貿易商会であると推定」とし、小学館『日本歴史大辞典』は、「払い下げを申請したのは開拓使の書記官たちで、その背後には北海道物産の取扱いを目的として結成された関西貿易会社があると推定」としています。

『函館市史』は推定を超えて、「北海社と関西貿易社は、最初から合併を前提に考えられ、世論攻撃を想定した配慮から別会社で出発することにした」と断定し、「この文章がいつ作成されたか不明であるが、おそらく五代が上京中のことと思われる。五代らと開拓使の幹部は、払い下げ計画について綿密な打合せがなされていたわけである」という陰謀論を仕立てあげています。

川崎勝「北海道開拓使官有物払下事件と『東京経済雑誌』の開拓使論」（武蔵野大学政治経済研究所年報

第六号)も、合併が合意されていたと断じます。「開拓使官吏の期待や関西貿易社の勝手な『合併』構想ではなく、五代と黒田との合意されたものと推測しても間違いのないであろう。したがって、実態としては、輿論の動静の通り、関西貿易社への払い下げに他ならなかったのである」と書いてあるのですが、まず「推測して間違いのないだろう」と推測し、「したがって関西貿易社への払い下げに他ならなかったのである」と断定します。この理屈は「Aは事件の犯人であると推測できる。したがって、Aは事件の犯人である」とするのにも似た、驚くべき論法です。

『函館市史』も川崎勝の論文も、五代をボロ儲けを企む悪徳商人として描きたいという劇画的な願望でいっぱいになっていると言わざるをえません。これはもう『市史』の世界でもなければ、学術論文の世界でもありません。五代友厚を考える上で欠かすことのできない観点は、私が自著『新・五代友厚伝』で述べたように、五代が「利他の心」をもつ志の人であったということです。

このように五代悪徳商人説は二段構えとなっています。一段目の間違いが明らかになったとしても、二段目は泰然として自説を維持できるという関係になっています。

この二段構えにはもうひとつ問題があります。一段

目の悪徳商人説が正しければ二段目の悪徳商人説は成り立たず、二段目の悪徳商人説が正しければ一段目の悪徳商人説は成り立たない、という関係になっています。奇妙なのは、どちらの側の歴史研究者も他方の説を批判しないことです。その結果、相矛盾する説が教科書・歴史年表・歴史事典・市史などの大なり小なり公的性格を帯びる文献に併存していることです。しかも両方とも間違っているのです。こういう状態を放置している近代日本史学界はどういうことになっているのでしょうか。

以上で、私の報告を終わらせていただきます。

つぎに、鹿児島大学名誉教授・志学館大学教授原口泉先生に「五代友厚と私」というテーマで報告いただきます。原口先生よろしくお祈りします。



八木孝昌 Yagi Takamasa

1941年京都市生まれ。1966年大阪市立大学経済学部卒。大阪市立大学生生活協同組合専務理事、大学コンソーシアム大阪事務局長、学校法人帝塚山学院常務理事を歴任。2009年万葉集の研究で文学博士の学位。著書に『大阪府生活協同組合連合会50年史』、『解析的方法による万葉歌の研究』(和泉書院)、『帝塚山学院一〇〇年史』(共著)など。2020年大阪市立大学同窓会の依頼により『新・五代友厚伝』(PHP研究所)上梓。翌2021年同窓会より『新・五代友厚伝』のダイジェスト版『開学の祖 五代友厚小伝』刊行。同年11月3日の「五代友厚官有物払い下げ説見直しを求める会」発足の契機となる。

原口 泉先生報告

「五代友厚と私」

近代史研究者として鹿児島からの報告



志學館大学の原口泉です。懐かしいですね、六年前、NHK朝ドラ『あさが来た』のとき、五代友厚の5つ目の銅像の除幕式があり、大阪市立大学のこの立派なホールで講演させていただいたことを思い出します。大阪万博は1970年でしたね。2025年には2度目の大阪万博が開かれます。今年4月には大阪公立大学が新しく誕生し、市大の1号館はミュージアムになるそうで、嬉しいです。

実は五代友厚は自分が開拓使官有物払い下げを受けようとしたという間違った情報が広まったときに、弁解していません。本人は、自分がやっていないと証明できたのに、敢えて言わなかった。私は薩摩の人間だからこう思うんです。開拓使高官の安田定則や折田平内は自分の可愛い後輩なのですよね。先輩は後輩を貶めない。汚名をかぶっても自分が責任を取る。当時自由民権運動の高まりの中で、関西財界の広瀬宰平は払い下げの相談を持ち掛けられた五代のことを心配していますね。広瀬は五代が大阪にいて欲しかったのでしょう。言い訳をしないというのは「薩摩的美学」か

もしれません。そのため冤罪を被ったと思います。風評って怖いなと思いました。今でも最初のSNSのフェイクニュースが、拡散すると恐ろしいですよ。冤罪を晴らすには、事実経過を克明に実証する必要があります。

末岡先生のお話が史料に基づく研究成果です。5月には、学術的な研究書としてミネルバ書房から出版されます。丁度、今年は「ラスト市大」で、4月には大阪公立大学になりますよね。大阪市立大学の学生さんたちは五代友厚が大阪商業講習所設立発起人として開学の祖であることを誇りに思っただけで、このシンポジウムは学生の星山梨絵さんの司会、素晴らしいプレゼンテーションがありましたから、五代の精神を受け継いで下さる若い人がいらっしゃるんだということが分かりました。私は鹿児島へ帰りますが、この学生の意識を鹿児島の大学生への土産にいたします。

実は昨日は新型コロナの蔓延防止令が出ていませんので、かろうじてJAL便で大阪入りできました。機内誌に大阪商工会議所のPR頁がありました。嬉しいことに五代友厚（初代会頭）・7代土居通夫・10代稲畑勝太郎3人の銅像写真が掲載されていました。



大阪商工会議所銅像
五代友厚（初代）・土居通夫（7代）・稲畑勝太郎（10代）

私は東京大学文学部の国史学科で学びました。東大には古代史の井上光貞先生、中世史の佐藤進一先生、近世史の尾藤正英先生、立教大学には大久保利謙先生がおられました。大久保先生は利通の孫です。東大出

身の大久保先生は近代史の最高権威です。どんなに優れた研究者でも、パーフェクトではありません。誤りを改めることできるのも偉い先生の証です。大久保先生ほど史料、エビデンスを大切になさる学者はいらっしゃらなかったという意味で、官学アカデミズムの象徴的な方でした。したがって今日、八木先生が『国史大辞典』とか、教科書出版社の日本史の叙述とか、色々ご紹介されましたけれども、火元は一つです。大久保先生の依拠された資料が、はじめは推察と断っておいて、結論では事実だとしてしまうような書き方になっています。実は山川出版社の教科書は大抵東京大学の著者です。最近NHKの『英雄たちの選択 伊藤VS大隈』を喜んで見ていたのですが、最後に「それでも五代は悪いのね」という印象的なコメントで番組が終わっていました。学術研究書の刊行が、待たれる所以です。



鹿児島の方が建てた五代の単体の銅像は、一つもありません。鹿児島中央駅前の「若き薩摩の群像」の19体の中の1人が五代です。昔から鹿児島にある五代友厚銅像は大阪の方が寄付されたものです。今、現在の泉公園に移設されています。もと鹿児島の商工会議所があった場所です。2015年から16年に『あさが来た』が放送されて、鹿児島城近くの五代友厚の生誕地が市によって整備され、憩いの場所となっています。薩摩での五代の悪評は、やはり西郷さんにあまり好かれて

いなかったからかもしれません。西郷が一番信頼していた家老だった桂久武は、明治2年12月手紙の中で五代を「利のみの人間」と書いています。桂は五代を経済の面で活用すべきだと書いたのであって五代を貶めるための手紙ではありません。ここでいう利とは公益の事でしょう。桂は薩摩の武闘派ではありません。武闘派から五代は徹底的に嫌われました。イギリスのスパイ呼ばわりされたり、「才気走ったハイカラなキザ野郎」と揶揄されています。日本経済大学の竹川克幸教授、私の優秀な教え子が教えてくれた他藩人による五代評があります。慶応2年12月久留米藩士の日記に大坂での五代の評判が書かれています。「人才博識(じんさいはくしき)の人」長崎の五代友厚は、大阪での評判が、人才博識とありますから、よほど、才走った方だったと思います。映画の「天外者」もお利口な子という鹿児島言葉です。お父さんの秀堯は優れた儒学者でした。



先祖は実はすごい豪傑です。島津義弘と日向の伊東氏との、天下分け目の決戦、木崎原の合戦(1572年)で、義弘は300の兵で3000の伊東氏の敵兵に、圧勝しました。五代の先祖友喜は、その時に義弘の家老でした。勲功の家筋で代々才能がありました。幕末には五代友厚の父秀堯は江戸や伏見で勤めています。薩摩では、記録奉行です。硫黄島、黒島、竹島の三島へも史料調査に渡っております。『三国名勝図会』という地

理志全60巻の編纂の総裁をしていました。薩摩・大隅・日向3ヶ国の名所旧跡、神社・仏閣・古城などの由来、山川邑里の人物・伝説・古文書・物産・風俗などを網羅した地理書です。城の一角、城ヶ谷に自宅がありました。次男だった友厚の幼名は徳助です。母は本田氏、やはり記録奉行の家でした。五代家は、薩摩藩の文化官僚に位置付けられる、開明的なインテリの家です。家格は中クラスの小番、家禄は100石以上あります。西郷や大久保家より上です。



城ヶ谷の五代友厚生家跡（八木孝昌 撮影）

8才の時に児童院に入ると諸書に書かれています。児童院という学校はありません。地域の先輩たちが、後輩を地域で教えるという郷中教育のことで。各家庭が座元になります。『三国名勝図会』が天保十四年、1843年に完成します。その翌年、1844年、弘化元年琉球に、フランス艦隊がやって来て、貿易を要求しております。どう対応すべきか。秀堯は通商すべきだと書いた『琉球秘策』という著書を琉球へ渡る役人に渡しました。秀堯を「琉球交易掛」としている本がありますが、そういう役職はありません。

天保10年（1839）、徳助が4才の時、『新訂万国全図』という世界図の模写を父秀堯が命ぜられて、徳助は地図を2枚作って一つは地球儀にしたという有名な話は、実は誤伝です。映画は誤伝のままです。敢えて徳助の開明性を示すような演出でした。模写したのは13才の兄徳夫（友健）です。秀堯は模写された「新訂万国全図」に貼り付けた由緒書に徳夫は「奇童（神童）」だと書いています。世界地図の四隅の小図は、本田家

から嫁いで来た母ヤスが写しました。家族ぐるみの仕事でした。徳助（才助）は4才の子供でしたが、興味を持ったことでしょう。あの映画で、提灯に貼り付けた地球儀図は、満4歳の徳助なら母親が手助けがあれば出来るかもしれないと思いました。

映画「天外者（てんがらもん）」は2019年に京都撮影所でクランクアップしました。公開されたのは、2020年の12月11日です。私の知人で、168回、ご覧になったご婦人がいます。鹿児島でこの映画が公開されているのに、観客が少ないと、鹿児島の恥になると、こう云う方もいらっしゃるんです。田中光敏監督がおっしゃったことですが、世の中、自分だけ、金だけ、今だけの人、それとは真逆のことを演じて下さいと三浦春樹さんに言ったら、三浦さんは、腑に落ちたそうです。それで、私の劇場公開用の冊子に書きました。五代は要するに、公益、国の益に殉じた、利他の男。それを証明するのが、死んだ時に、百万円の借金を残した。今の何十億円です。そんな借金を残したら、家族がどう思います？家族は苦勞されたと思います。明治の初期の経済、ビジネスを動かすのは、政商です。政商だから悪い人、ではありません。国の税が地租で入って来て、経済は動きます、大阪に産業基盤を築くことに生涯を捧げた五代友厚と渋沢栄一は通じるところが多いです。五代は大隈重信に五つの忠告をしていますね。部下と自分の意見が大差ないときは部下の論を採用せよ、つまり手柄は部下に立てさせろということを行っていますね。大隈は早稲田大学の同窓会で、五代と同じことを訓戒しています。五代は、自分が考えたことを大阪の後進にやってもらうというスタンスを崩さなかったのだと思います。

渋沢栄一は91才まで生きて、多くの功績があります。明治6年、国立銀行条例を作るとき渋沢が五代に出した手紙が数通あります。手紙には公益、バンクとあります。渋沢は小野組と三井の合本による第一国立銀行の創設に苦勞しました。五代への手紙に、苦衷を述べています。五代は渋沢のビジネスの師匠だと思います。渋沢は、あちこちに国立銀行の支店を出すときに、五代に相談しています。これは大阪商工会議所が昭和48年に刊行した『五代友厚関係文書目録』に記録されて

います。渋沢と五代は共に日本資本主義の父です。大阪会議、花外楼のあの明治8年の会議だけでは五代は影の立役者に徹しています。五代を演じられたディーン・フジオカさんからこのシンポジウムにメッセージを頂きました。公開しても良いとおっしゃっています。この後、鹿児島大学の松田忠大法文学部長が、Zoomで参加して下さいますので、松田先生から、また鹿児島の新しい取り組みもお話しして下さると思います。鹿児島大学での五代友厚の講演会にディーン

さんをお呼びしたいですね。脚本家の大森美香先生は五代を准主役にした『あさが来た』と渋沢栄一を主人公にした「青天を衝け」を書かれるときに、五代を徹底的にリサーチされましたね。『え、こんなことあるの?』と史実に対する批判が沢山あります。大森先生は史実を踏まえたくて新しいドラマを作られたのです。五代をあらゆる困難に最初に立ち向かうファーストペンギンに例えました。視聴者は「びっくりポン」と驚きました。



開学の祖 五代友厚小伝

高遠な志・進取の精神・利他の心

八木孝昌



大阪市立大学同窓会



原口 泉 Haraguchi Izumi

1947年鹿児島県生まれ。1974年東京大学文学部国史学科卒。1979年同大学院博士課程修了。鹿児島大学法文学部人文学科助手を経て、1998年教授。2011年志学館大学人間関係学部教授。鹿児島大学名誉教授。現在に至る。専門は日本近世史・近代史で、戦国時代以降の薩摩藩史や奄美群島・琉球の歴史にも造詣が深い。2019年第70回NHK放送文化賞受賞。著書に『西郷どんとよばれた男』（NHK出版）、『西郷隆盛はどう語られてきたか』（新潮社）、『薩摩藩と明治維新』（志学館大学出版会）『近代日本を拓いた薩摩の二十傑』（燦燦社）『渋沢栄一「論語と算盤」を読む』（幻冬舎）など多数。

松田忠大 部長 Zoom 鹿児島大学からの報告

鹿児島大学の法文学部を中心に、鹿児島の近代を教育・研究する拠点の整備を行う事業構想—文理融合型「『鹿児島の近現代』教育研究拠点」整備と地域貢献事業展開—についてご報告させていただきます。

【目的】総合大学たる鹿児島大学、人文社会系総合学部たる法文学部の強みと特色を生かし、日本の近代化の過程を鹿児島の地域拠点から専門的・学際的に研究として、①「『鹿児島の近代』教育研究センター（仮称）を設置」②地域が有する近代化遺産・自然遺産等を有効に活用しうる環境整備と多角的・学際的な研究③自治体や企業等と連携し地域の文化・観光資源を活用する地域マネジメント研究④地域創生を担う地域マネジメント人材育成事業を展開し、その成果を地域社会に広く還元する。

【取組内容】「鹿児島の近代」教育研究センター設置・地域マネジメント人材育成

鹿児島大学法文学部は、鹿児島の近現代教育研究事業整備事業を通して、今後も大阪市立大学の皆様と連携をさせて頂きながら、先人たちが残してくれた様々な功績について、学術的に、正しく理解、解明し、その成果をしっかりと地域、我が国の発展のために還元し、地域の活性化を図って行きます。現代社会を生きる私たちもそうですけれども、これからの我が国、国際社会を担うべき若者を中心とした人材育成としっかりと活用にできる仕組みづくりを行なって参りたいと考えております。



薩摩藩英国留学生記念館 長崎 崇 館長

【薩摩藩英国留学生記念館】概要

1865年4月、東シナ海に面した薩摩半島羽島浦（現鹿児島県いちき串木野市羽島）に一隻の洋式機帆船が姿を現します。それは、英国留学、視察密航の旅に出発する若き薩摩藩士19名を乗せるための密かな寄港でした。選抜された留学生は羽島の地に2ヶ月間滞在し、機帆船オースタライエン号に意を決して乗り込んだのです。それはまさに日本の近代化を進める大きな一歩でありました。いちき串木野市は薩摩藩英国留学生の留学の旅路と帰国後の功績を後世に伝えるために、2014年7月、薩摩藩英国留学生記念館を開館し、これまで20万2千人（2022年1月現在）の方々にご来館いただきました。

【五代友厚展】（2／11～6／27）

激動の幕末、薩摩藩に英国留学生ら使節団の派遣を上申し、自ら引率として海を渡った五代友厚。帰国後は明治新政府の官僚として外務や財務を担当、大阪判事も兼ね、大阪復興に尽力。33歳で官を辞すると全国で鉱山業を興し、現在の大阪商工会議所や大阪株式取引所、大阪市立大学の前身にあたる商業講習所を設立するなど実業家としての腕を発揮し、大阪の恩人と呼ばれるまでになりました。一方で「北海道官有物払い下げ事件」関与の疑いから政商のイメージを背負うことに。時は流れ、その後明らかになってきた五代に関する史実、五代を追いかける今を生きる人たちを通して、ドキュメンタリー映像とパネル展示で五代の「赤き心」を探ります。

※赤き心（赤心）とは五代が書簡等で残した言葉で、曇りのない真心という意味。



Zoom画面／左：長崎館長

天王寺商業同窓会 山田庸男 会長

1880年に五代友厚が創立した大阪商業講習所がこの天王寺商業のルーツで、学校では創立年を、大阪商業講習所後身である大阪高等商業学校から大阪市立大阪甲種商業学校が独立開校した1912年としていた。大阪市立大学とはルーツが同じなので、市大が兄貴分で天商が弟分である。

創立百周年の2012年（建学132年）に市岡商業高等学校・東商業高等学校と統合し、大阪市立大阪ビジネスフロンティア高等学（以下、OBF）が天王寺商業高等学校敷地に開設し、天王寺商業は幕を下ろした。天商同窓会では、創立百周年の年に、なにか記念となり後世に伝えたい二つの事業として、ひとつは大阪城外堀に枝垂桜記念植樹、天商の校歌碑を建立、ひとつはOBF正門横に、五代さんは関西経済（商工会議所、証券取引所、商業教育など）のインフラをつくった中興の祖である思いから、市大の五代友厚像より少し早くに五代友厚像を建立した。

天商同窓会としては、組織として五代友厚を正しく認識し、次の世代であるOBF在校生にも講演会の機会を設けるなど、大阪市立大学同窓会と連携して五代友厚を正しく次の世代に伝える運動、また、大阪市立同窓会が総力で取り組んでいる五代友厚の汚名を晴らす署名活動にも微力ながら取り組んでいく。



五代友厚研究会 片山翔太 代表

私は大阪市立大学新聞部代表で、五代友厚名誉回復を目的とする五代友厚研究会代表でもあります。昨年、八木先生の『新・五代友厚伝』読書感想文を各学生団体代表から募ったり、読書感想文を寄せた学生による座談会をコーディネートしました。読書感想文を寄せた学生に呼び掛けるも、反応がにぶかったので私は「利他の精神」をもって奔走して八木先生を囲んで5人による座談会を開催した。

座談会では、五代友厚名誉回復のため学生としてなができるか、まず学生向けの学長メッセージをいただくとなった。私自身、五代公に無関心、自分の利益を優先する学生たちを動かして五代友厚名誉回復運動を展開するミッションはできなかつたと反省している。

大阪市立大学新聞で五代友厚顕彰記事連載、いろいろな機会が五代公を話しするなど、私を動かしたのは「利他の精神」であります。五代公がかかげた「利他の精神」は尊く、自己犠牲的で簡単に真似できるものでないことを実感しました。五代公が私利私欲のために、教科書に記述されているようなことをしたとは思えない。将来、教科書記述が変わると信じています。

ディーン・フジオカさんからのメッセージ、応援の言葉に驚きと、ディーンさんの五代公への同じ思いをもっていただけて心強いです。ディーンさんの楽曲「Hiragana」も素晴らしく感動しました。ディーン・フジオカさん応援メッセージありがとうございました。



パネラー最終意見と田頭鹿児島大学副学長発言

八木) 続いてパネラーから、一人三分程度で言い残されたことなどを発言していただきます。まず末岡先生からお話しいただきます。シンポジウムのまとめは原口先生をお願いします。

末岡) 本シンポジウムにお招きいただき感銘を受けています。そもそもは、3年前に八木先生が、五代友厚伝を出版したいので私の論文を参照したいとのことで、来訪いただいたのが始まりです。八木先生の熱意が荒川学長・児玉同窓会長を動かし、ひとつのうねりとなって、本日のシンポジウムを迎えられたこと、嬉しく思います。原口先生にも鹿児島から来ていただきました。「天外者」を見たいと思いつつ見逃していましたが、昨年12月に1日だけ全国一斉に「天外者」が上映された折に、滋賀で見ることができました。この映画監修はお隣の原口先生でした。映画最後は、五代公が亡くなった折の葬儀の場面には本当に感動しました。ありがとうございました。



八木) 私からは二つ申し上げます。ひとつは、昨年3月、荒川学長に同行して文部科学省教科書担当官を訪問し、五代記述についてきちんと審議・検定していただきたいとお願いしたことです。教科書担当官からは、積極的な活動として、「世論を高める」「学会に働きかける」というアドバイスをいただきました。2月末には、文部科学省に報告に行こうと思っています。



もう一つは、この一年間で「五代無実」がどんどん明らかになってきていることです。

典型的な例として、ドラマの中での五代無実

論の出現があります。昨年11月21日、NHK大河ドラマ「青天を衝け」第35回放送の冒頭で、官有物払い下げ事件が扱われました。まず「東京横浜毎日新聞」が写しだされ、弁士が「五代けしからん」と街頭で演説している場面があり、次に伊藤博文が大臣室に現れて、「こげな記事はでたらめじゃ」と叫びます。そのあと渋沢栄一と五代友厚が話し合う場面があります。渋沢が五代に「なぜ反論しないのですか。そもそも新聞が書いていることもデタラメばかりじゃありませんか」と迫ります。五代は「そのうち別の新聞が真実を書いてくれるじゃろう」と答えます。この一連の場面では、五代が無実であるという扱いになっています。全国の多くの人たちが見ているNHKの大河ドラマで、五代の無実が描かれたというのは、とても大きなことだと言わなければなりません。つまり、高等学校の日本史教科書の記述とは真正面から異なることを描いたわけです。

このドラマの脚本はこれまでに数々の受賞実績をもつ大森美香さんが担当しましたが、昨年12月17日に大阪商工会議所で大森さんの講演があった際、私は講演前に大森さんにお会いすることができました。開口一番、「五代無実を前提にした脚本を書いていただきありがとうございました」とお礼を言いました。大森さんは、「五代の人物像をつくるにあたっては、あなたの『新・五代友厚伝』を参考にしました。番組スタッフもこの本を読んでいます。たぶん私が一番よく読んだのではないのでしょうか」とお答えになりました。私はびっくりするとともに、とてもありがたく思いました。また、大森さんは「私が『朝が来た』で五代を描いた時は、この本が出版されていませんでしたが、今回は大いに参考にしました。私の『新・五代友厚伝』にはいっぱい付箋が貼りつけてあります」と言っていました。

大河ドラマ「青天を衝け」が開拓使官有物払い下げ事件の五代を無実であるとしたのは、

NHKの影響力からして非常に大きなものがあります。五代有罪説は一部の頑迷な歴史学者がしがみついているだけの虚説であり、今や風前の灯になろうとしているという気が私にはしみます。別の言い方をすれば、五代無実説には確固とした証拠が揃っているのに対して、五代有罪説は「東京横浜毎日新聞」の誤報以外に何一つ根拠を示すことができないというお粗末さです。ここにご参加いただいた皆さまと共に、五代の濡れ衣を晴らすために頑張っていきたいと思えます。

今回、Zoomでご参加いただいている鹿児島大学副学長の田頭吉一先生に少しご発言をお願いします。

田頭) 自己紹介させていただきます。私は昨年3月まで大阪市立大学法人本部である公立大学法人大阪で理事を2年間、その前の4年間は大阪市立大学経営審議会委員をやっております、足掛け6年間大阪でお世話になりました。その間、多くの同窓会の方々と親交を深めさせていただき、五代友厚が明治維新後の大阪を振興したことや、大阪市立大学の元となる大阪商業講習所の創設したことなど大阪にとってかけがいのない役割を果たした人であると感じました。私自身、鹿児島で生まれ育ち薩摩の英傑を小さい頃より教わりました。



五代友厚については、私が大学生になった頃に、鹿児島中央駅（旧鹿児島西駅）前に若き薩摩の群像（幕末に薩摩藩から英国に渡航した19人の群像）が建立されました。その群像の中で一番見晴らしのよい処に鎮座し、桜島に向かって指さしている人物がいます。この人は何に向かって指さしているのだろうかと思いました。その像が五代友厚でした。五代友厚は三

浦春馬さんの映画にあるように「天外者（てんがらもん）」といわれましたが、私自身は鹿児島弁でいう「ぼっけもん（大胆な人の意）」のほうがぴったりするように思っています。

私は縁あって文部科学省から出向して、大阪に行きました。大阪での仕事の最後の年に、私は荒川学長先生や八木先生の情熱にほだされて文部科学省までお二人等をお連れし、教科書問題等をお話しさせていただきました。その際に、「学会を動かす」ように示唆をいただきましたので、次に鹿児島大学に赴任したときに、原口泉先生を訪問して、「先生、学会を動かしてください」とお願いしました。原口先生からは「学会だけではダメだ、世論を動かさない。何のために鹿児島に戻ってきたのだ」と言われました。確かにその通りだと思いましたので、世論形成にとって役立つような取り組みもさせていただいており、引き続きこの活動にお力になりたいと思っております。

本日、五代友厚シンポジウムが開かれましたことを嬉しく思いますし、大阪市立大学同窓会の皆様、荒川学長先生はじめ大阪市立大学の方々の努力に敬意を表します。

鹿児島大学松田法文学部長より報告がありましたように、今度は鹿児島でシンポジウムを行います。多くの方々にご参加いただければと思っております。よろしく申し上げます。本日はありがとうございました。

八木) 最後に原口先生にシンポジウムのまとめをお願いします。

原口 泉先生シンポジウムまとめ

原口) 大阪市立大学同窓会鹿児島支部長の中村俊久様は、署名活動を鹿児島県でやっていらっしゃる。八木先生の熱きパッションとミッションに支えられて本日のシンポジウムが開催されました。このイベントは、新しい未来を拓こうとするものであり、これからのビジョンを築く為の第一歩と強く感じました。大阪公立大学が、新しく発足します。鹿児島大学から呼びかけがありましたように、大学と、高等学校が連携していく事が必要だと感じました。

七高造士館の伝統を受け継ぐのが鹿児島大学法文学部です。法文学部は明治維新・近代史の研究をやらなくてははいけません。「鹿児島の近代教育研究センター」という新たな全学組織が、発足することになりました。今日、初めて、松田忠大先生からのお披露目でございます。大阪は、万博の、1970年と2025年の地であるということから、新しい、持続可能な観光開発のモデルプランを作り上げていくことが出来る所ではないのかなと思えます。アフターコロナ、ウィズコロナで、新しい生き方が大学の方から提示されなきゃならない時代になっております。特に沖縄は新型コロナのために1000万人

のインバウンド観光客が来なくなりました。観光だけに特化した、在り方も反省しなければなりません。しかし、今から、大阪のような製造業を築くことは、難しいでしょう。沖縄では国際的な物流基地として、那覇空港を南に向けたハブ空港化しようという、新しい模索が始まっております。1月7日から私は対馬に三日間行って来ました。対馬は、令和元年に、韓国からの観光客がゼロになりました。その前の年まで41万人、韓国人が対馬にやって来て、爆買いを含めて、それだけで潤っていたんです。ところが、それがゼロになった時に、対馬の良さを、伝統を見直すことが大事であると考え始めました。持続可能な観光を模索するという、真剣な、危機意識を持った取り組みを、対馬市民と対馬市役所はやっております。92億円の収入がゼロになったんです。新型コロナ禍はまだ続きそうです。それぞれの地域が、これまでに無かった難しい課題を抱えて、これを解決する為のビジョンを示のすが今日のイベントの意義だったのではないかと思います。八木先生に感謝しながら、末岡先生の学術的な研究書の刊行を待っております。どうも、ありがとうございました。



「五代友厚シンポジウム」 声明

大阪市立大学同窓会・大阪市立大学は、「明治14年の北海道開拓使官有物払下げ」に関し、高校日本史教科書等が事実誤認の記述をしていることに鑑み、開学の祖・五代友厚の無実を包括的に明らかにし、五代の名誉を回復するため、「五代友厚シンポジウム」を開催しました。

今日まで「官有物払下げ事件」に関し、諸高校の日本史教科書は「政府は北海道開発のために1400万円を投じてきた官有物を開拓長官黒田清隆の提案に基づき同じ薩摩出身の政商五代友厚らの経営する関西貿易社に38万円余という破格の安値で払下げることにした。世論は藩閥官僚と政府の癒着としてこれを激しく批判した」という趣旨の記述をしています。

しかし、明治政府が関西貿易社への官有物払下げを決定した事実は全く存在しません。払下げ先は安田定則ら開拓使上級官僚4名が退職して設立することになっていた民間会社であり、このことは国立公文書館が所蔵する政府史料「開拓使官有物払下許可及び取り消しの件」によって明白です。

更に、五代の無実はこの間の諸研究・図書及びNHKの歴史番組等によって世論となりつつあり、今や高校日本史教科書の官有物払下げが事実誤認であることは誰の目にも明らかになるうとしています。

当シンポジウムは長期間にわたって五代友厚について誤った記述を掲載している高校日本史教科書の制作会社に対して記述の訂正を強く求めます。

それは高校生に間違った歴史が教えられたことを正すためであるとともに、長年にわたって損なわれてきた五代友厚の名誉を一日も早く回復するために外なりません。

以上を当シンポジウム参加者一同の声明とします。



令和4年1月22日

五代友厚シンポジウム
参加者一同

五代友厚シンポジウム 謝辞



荒川哲男（大阪市立大学学長）

皆さん、長時間にわたりご聴講ありがとうございました。

私自身も本当に感動いたしました。このシンポジウムが日本全国に行き渡るようにこれから広報にもお願いしたいと思います。鹿児島からはるばるお越しいただいた原口先生、本当にありがとうございました。末岡先生には、五代無実のエビデンスを初めてここで発表いただきありがとうございました。これまで五代無実の推測の域を出ないと五代無実反対の学者は言っていました。これで反論はできないと思います。

学生有志で、努力していただいて五代友厚研究会を立ち上げたり、HIJICHOという学生新聞にて五代友厚を知ってもらおうという啓発活動には頭が下がる思いです。

伊集院静さんの『琥珀の夢』は、サントリー創業者の鳥井信次郎さんが主人公で、彼は大阪商業講習所の次のステップである大阪商業学校に在籍され、私どもの大先輩です。彼が五歳の時に、五代友厚公葬儀に4千人が集まった行列に出会ったくだりの描写がありました。

このように多くの人におしまれてなくなられた方が暴利をむさぼるような人であるはずがないことは誰がみても明らかなのですが、こんなに長く教科書では悪

徳政商のような記述がなされてきましたが、その記述が正される日が近づいていると喜んでおります。

このようなシンポジウムができたのも、元をたどりますと児玉先生の銅像を作りたいという熱意、調査にかなり時間がかかったと思いますが、八木先生の本出版の執念が続いてきたからだと思います。

これで終わるのではなく、次は大森美香さん脚本のよる五代友厚を主人公としたNHK大河ドラマ実現、その次は八木さんが執筆された『五代友厚小伝』が大阪府下の中学・高校生の副読本になるように大阪府教育委員会に働きかけていただきたい。児玉先生、私の二つの提案はいかがでしょうか？（会場から大きな拍手）賛同いただけたのでよろしくをお願いします。

今年はラストイチャダイの年ですが、ラストとは“最後”“続く”の意味があります。この五代友厚シンポジウムは続いていきますし、本学も4月には大阪公立大学となり、大阪市立大学遺伝子・大阪府立大学遺伝子を受け継いで育っていきます。

本学の五代像は、大阪では5台（代）目となります。真の五代像はここにしかありません。五代友厚像を見られてない方は、ぜひ見てお帰りください。よろしくをお願いします。ありがとうございました。



五代シンポジウム／座長：八木孝昌先生、原口 泉先生、末岡照啓先生



五代友厚記念事業委員長 児玉隆夫

司会／SHK市大放送研究会

五代シンポジウム声明文読み上げ(左：中居、右：橋本)



天王寺商業同窓会の皆さんと、五代友厚記念事業委員会：植田浩吉委員・学生による討論会。関西TVの取材を受けた。(田中記念館3F)



五代友厚パネル・学生活動報告パネル展示。五代友厚名誉回復のための署名もお願いした。

令和3年12月27日

東京書籍社長 渡辺能理夫 様

五代友厚官有物払い下げ説見直しを求める会
代表 児玉隆夫（大阪市立大学元学長）

謹啓

私、大阪市立大学同窓会五代友厚記念事業委員会の委員長児玉隆夫は、標記「見直しを求める会」の代表として貴職に本状を差しあげます。

大阪市立大学は明治13年に五代友厚が中心となって創立した大阪商業教習所を母体としており、五代は同大学の開学の祖となっております。その五代について貴社高等学校教科書『新選日本史B』（令和2年発行）は以下のよう記述されています。

開拓使の長官黒田清隆が財政危機打開のため、1881年に官有物を安い価格で同じ薩摩出身の五代友厚に払いさげようとしたところ、藩閥の横暴だとして激しい攻撃を受け、払下げは中止された。

しかしながら、明治14年に開拓長官黒田清隆が「官有物を安い価格で五代友厚に払い下げようとした」事実はありません。政府が決定した払い下げ先は開拓使の安田定則以下4人の上級官吏が退職をして設立する予定であった民間会社に対してであり、このことは国立公文書館が所蔵する開拓使官有物払い下げの政府決定原資料によって明白です。

昨年9月に大阪市立大学同窓会の企画による『新・五代友厚伝』（PHP研究所）が刊行されたことを契機として、史実に基づいた五代についての記述を日本史教科書各社にお願いするために、本年11月3日に大阪市立大学関係者および有識者47名は「五代友厚官有物払い下げ説見直しを求める会」を発足させました。

つきましては、当会代表の私児玉隆夫が直接貴社をお訪ねして、貴社高等学校日本史教科書の五代記述について、見直しをお願いしたいと思っております。ぜひその機会を設けていただきますようお願い申し上げます。お聞き届けいただける場合には、荒川哲男（大阪市立大学学長）と八木孝昌（『新・五代友厚伝』著者）とを同伴してお伺いいたします。同封返信用封筒にて1月20日までにご返事たまわれれば有難く存じます。

拝具

担当事務局：〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学同窓会事務局

問合せ先：同窓会事務局長 上村修三

電話：06-6605-2113、メールアドレス：uemura@ado.osaka-cu.ac.jp

《添付資料》

- ① 国立公文書館蔵「開拓使官有物払下許可及び取り消しの件（明治14年）」写し一式
- ② 『開学の祖 五代友厚小伝』（大阪市立大学同窓会刊）

○添付資料について

- ①国立公文書館蔵「開拓使官有物払下許可及び取り消しの件（明治14年）」

当資料は明治14年に政府が開拓使官有物払い下げを検討し、決定した際の原資料です。資料は大きく二つに分かれています。ひとつは、開拓長官黒田清隆が三条実美太政大臣に宛てて書いた、官有物を開拓使幹部官吏4人が退職して設立する民間会社に払い下げたいとする7月21日付「伺」、および開拓使幹部官吏4人による黒田長官宛て申請書と払い下げ物件明細書です。もうひとつは、内閣における「伺」文書の「回覧」から「承認」、「取消し」に至る一連の公文書です。いずれの政府文書においても五代は無関係で、五代の名前が出てくることはありません。

- ②「開学の祖 五代友厚小伝」（大阪市立大学同窓会刊）

『新・五代友厚伝』のダイジェスト版です。大阪市立大学の学生や教職員に同窓会が無償配布しました。第15話～第17話で払い下げ問題を取り上げ、五代の無実を論じています。

○その他「五代無実」を示す文献等について

- ①近年の歴史書における「開拓使官有物北海社払い下げ説」

1. 『『明治史講義【テーマ編】』第10講（早稲田大学教授真辺将之、ちくま新書、2018年）

——「従来、この官有物の払下げ問題については事実誤認が非常に多い」とし、「払下げ先は関西貿易社ではなく、開拓使官員の安田定則・折田平内らの設立した北海社」とし、さらに「当時の新聞の誤報に基づくこの事実誤認は、現在でも各種歴史書にそのまま記載されていることが多い」と記述しています。（170ページ）

2. 『明治十四年の政変』（武蔵野学院大学教授久保田哲、集英社、2021年2月）

——「七月に入ると、開拓使大書記官の安田定則、開拓使書記官の鈴木大亮・折田平内・金井信之という薩摩グループの四人が、払下げに関する意見書を黒田に提出した。その払下げ先が、安田・折田が設立した北海社であった。安田らは職を辞して、北海社の経営に従事することを表明した」という記述があります。（169ページ）

- ②NHK番組による「五代への払い下げ説」の否定

NHK歴史番組「英雄たちの選択 伊藤VS大隈」（放送2021年8月11日）

——標記番組は、明治14年の開拓使官有物払い下げ事件を説明して、開拓長官黒田清隆が開拓使官有物を「部下の役人につくらせた商社に払い下げようとしていた」というナレーションを入れました。

以上

(注) 同一趣旨の文書を高校日本史教科書刊行の清水書院・実教出版・第一学習社・明成社・山川出版社の各社長宛にも送っている。

令和4年1月26日

岩波書店 社長 坂本政謙様

五代友厚官有物払い下げ説見直しを求める会
代表 児玉隆夫（大阪市立大学元学長）

謹啓

私、大阪市立大学同窓会五代友厚記念事業委員会の委員長児玉隆夫は、標記「見直しを求める会」の代表として貴職に本状を差しあげます。大阪市立大学は明治13年に五代友厚が中心となって創立した大阪商業教習所を母体としており、五代は同大学の開学の祖となっております。その五代について歴史学研究会編の貴『日本史年表』第五版（平成29年発行）は以下のように記述されています。

7-21参議兼開拓使長官黒田清隆、官有物払下げを申請（-30 勅裁により五代友厚・中野梧一の関西貿易商會に代価38万円、無利息30年賦で払下げ決定、8-1発表）-26
「東京横浜毎日新聞」社説（～-28）、開拓使払下げ問題を暴露。

しかしながら、明治14年に「参議兼開拓使長官黒田清隆」の「官有物払下げ申請」により、「五代友厚・中野梧一の関西貿易商會に代価38万円、無利息30年賦で払下げ決定」という事実はありません。また、「『東京横浜毎日新聞』社説（～-28）、開拓使払下げ問題を暴露」という事実も存在しません。「東京横浜毎日新聞」は誤報を掲載しただけです。政府が決定した払い下げ先は開拓使の安田定則以下4人の上級官吏が退職をして設立する予定であった民間会社に対してであり、このことは国立公文書館所蔵の開拓使官有物払い下げ政府決定原資料によって明白です。

昨年9月に大阪市立大学同窓会の企画による『新・五代友厚伝』（PHP研究所）が刊行されましたが、それを契機として、開拓使官有物払い下げ事件の五代友厚について誤った記述のある高等学校日本史教科書の各刊行会社にその見直しを求めるべく、昨年11月3日に大阪市立大学関係者および有識者47名は標記「見直しを求める会」を発足させました。各教科書会社にはすでに要望の文書を送りましたが、同様の誤まった記述が見られる『日本史年表』第五版の出版社である貴社にも本状をお送りする次第です。

つきましては、当会代表の私児玉隆夫が直接貴会をお訪ねして、貴社『日本史年表』第五版の五代記述について、見直しをお願いしたいと思います。ぜひその機会を設けていただきますようお願い申し上げます。お聞き届けいただける場合には、荒川哲男（大阪市立大学学長）と八木孝昌（『新・五代友厚伝』著者）とを同伴してお伺いいたします。同封返信用封筒にて2月20日までにご返事たまわりますようお願い申し上げます。なお、貴社への本状と同趣旨の文書を、別便で編者の歴史学研究会にもお送りします。

拝具

担当事務局：〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学同窓会事務局

問合せ先：同窓会事務局長 上村修三

電話：06-6605-2113、メールアドレス：uemura@ado.osaka-cu.ac.jp

《添付資料》

- ① 国立公文書館蔵「開拓使官有物払下許可及び取り消しの件（明治14年）」写し一式
- ② 『開学の祖 五代友厚小伝』（大阪市立大学同窓会刊）

○添付資料についての説明

- ①国立公文書館蔵「開拓使官有物払下許可及び取り消しの件（明治14年）」

当資料は明治14年に政府が開拓使官有物払い下げを検討し、決定した際の実資料です。資料は大きく二つに分かれています。ひとつは、開拓長官黒田清隆が三条実美太政大臣に宛てて書いた、官有物を開拓使幹部官吏4人が退職して設立する民間会社に払い下げたいとする7月21日付「伺」、および開拓使幹部官吏4人による黒田長官宛て申請書と払い下げ物件明細書です。もうひとつは、内閣における「伺」文書の「回覧」から「承認」、「取消し」に至る一連の公文書です。いずれの政府文書においても五代は無関係で、五代の名前が出てくることはありません。

- ②「開学の祖 五代友厚小伝」（大阪市立大学同窓会刊）

『新・五代友厚伝』のダイジェスト版です。大阪市立大学の学生や教職員に同窓会が無償配布しました。第15話～第17話で払い下げ問題を取り上げ、五代の無実を論じています。

○その他「五代無実」を示す文献等について

- ①近年の歴史書における「開拓使官有物北海社払い下げ説」

1. 『明治史講義【テーマ編】』第10講（早稲田大学教授真辺将之、ちくま新書、2018年）

——「従来、この官有物の払下げ問題については事実誤認が非常に多い」とし、「払下げ先は関西貿易社ではなく、開拓使官員の安田定則・折田平内らの設立した北海社」とし、さらに「当時の新聞の誤報に基づくこの事実誤認は、現在でも各種歴史書にそのまま記載されていることが多い」と記述しています。（170ページ）

2. 『明治十四年の政変』（武蔵野学院大学教授久保田哲、集英社、2021年2月）

——「七月に入ると、開拓使大書記官の安田定則、開拓使書記官の鈴木大亮・折田平内・金井信之という薩摩グループの四人が、払下げに関する意見書を黒田に提出した。その払下げ先が、安田・折田が設立した北海社であった。安田らは職を辞して、北海社の経営に従事することを表明した」という記述があります。（169ページ）

- ②NHK番組による「五代への払い下げ説」の否定

NHK歴史番組「英雄たちの選択 伊藤VS大隈」（放送2021年8月11日）

——標記番組は、明治14年の開拓使官有物払い下げ事件を説明して、開拓長官黒田清隆が開拓使官有物を「部下の役人につくらせた商社に払い下げようとしていた」というナレーションを入れました。

以上

（注） 同一趣旨の文書を岩波書店『日本史年表』を編纂している歴史学研究会の事務局長宛にも送っている。

令和4年3月10日

東京書籍社長 渡辺能理夫 様

五代友厚官有物払い下げ説見直しを求める会
代表 児玉隆夫（大阪市立大学元学長）

謹啓

私は昨年12月27日付で貴職に書状を差しあげ、貴社高等学校教科書『新選日本史B』（令和2年発行）の以下の記述、

開拓使の長官黒田清隆が財政危機打開のため、1881年に官有物を安い価格で同じ薩摩出身の五代友厚に払いさげようとしたところ、藩閥の横暴だとして激しい攻撃を受け、払下げは中止された。

が事実と相違していることを申し上げました。明治14年に開拓長官黒田清隆が「官有物を安い価格で五代友厚に払い下げようとした」事実はありません。政府が決定した払い下げ先は開拓使の安田定則以下4人の上級官吏が退職をして設立する予定であった民間会社に対してであり、このことは国立公文書館所蔵の開拓使官有物払い下げ政府決定原資料によって明白であることを、当該原資料のコピーを同封して指摘させていただきました。

本年1月22日には大阪市立大学同窓会と大阪市立大学の共催による「五代友厚シンポジウム——開拓使官有物払い下げ説を問う」が開催され、そこにおいてパネリストの住友史料館末岡照啓研究顧問は五代友厚の無実の証拠となる新発見の事実を報告しました。発見された新事実とは佐佐木高行の日記『保古飛呂比』（東京大學出版會）の明治14年9月29日条に、「丸山作樂が黒田清隆や山田顕義等から親しく聞いた」事柄を佐佐木が日記に記録するかたちで、「五代友厚に黒田より相計り、関西貿易社にて、充分力を添へて、此の事業を盛大にせん事を望みたるに、五代も算当相立てたるも、到底今日にては利益もなく、目的不相立とて、相断りたる由」と書かれていることです。五代は黒田開拓長官から官有物払い下げを打診されて、採算上の理由で引き受けを断っているのです。

貴社の高校日本史教科書や岩波書店『日本史年表』等が「五代友厚の関西貿易社への開拓使官有物払い下げ」説をとっているのに対して、吉川弘文館『国史大辞典』や小学館『日本歴史大辞典』は「払下げを申請したのは開拓使の書記官たち」であることを認めた上で、しかし「その背後には北海道物産の取扱いを目的として結成された関西貿易会社があると推定された」として、五代友厚「黒幕説」をとっています。この黒幕説が根拠とするのは、大阪商工会議所所蔵の文書「開拓使官有物払下に際し継続会社設立一件」で、そこには開拓使幹部が設立する民間会社と五代友厚の関西貿易社の将来における合併が示唆されています。

しかし、『保古飛呂比』が記録するように、五代は黒田の提案を断っているのですから、『国史大辞典』や『日本歴史大辞典』が記述する「五代黒幕説」も成り立ちません。北海社と関西貿易社の将来合併を示唆する文書は、五代に官有物払い下げ引き受けを断られて、北海社の先行きに不安を覚えた開拓使幹部が「保険」をかけるようなつもりで、主観的な願望として両社合併案をメモ風の文書に仕立てたと見ることができます。この「保険説」は開拓使官有物払い下げ事件における五代が無実であるとする論者たちの間では以前から唱えられてきたものですが、今回の『保古飛呂比』における五代の「官有物払い下げ引き受け拒絶」の記録をもって、それが確定的なものとなりました。

従来の「五代政商説」は二段構えになっています。一段目は「明治政府は官有物を破格の安値で五代に払い下げようとした」とするものです。二段目は「明治政府が官有物を払下げようとしたのは開拓使上級幹部が退職して設立する北海社に対してであったが、その背後には政商五代がいて、(合併によって)官有物全体を手中に収めようとしていると推定された」とするものです。このうち、前者の説は国立公文書館所蔵の政府払い下げ関係諸文書によってその論拠が根底から覆ります。そして前者・後者の両説は『保古飛呂比』が記録する五代の「払い下げ引き受け拒絶」によってその論拠が根底から覆ります。

これだけの証拠が揃っている開拓使官有物払い下げ事件について、従来通りの「五代政商説」が維持されるのは、社会科学のあり方として、真理を探究する学問の立場として、春秋に富む若者たちへの教育の問題として、あってはならないことであると考えられるものであります。

今回お送りする資料、佐佐木高行日記『保古飛呂比』(東京大學出版會)に加えて、前回お送りした国立公文書館所蔵史料「開拓使官有物払下許可及び取り消しの件」も重ねてお送りしますので、両方をご参照いただき、貴社記述についてご検討いただきますようお願いいたします。

拝具

担当事務局：〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学同窓会事務局

問合せ先：同窓会事務局長 上村修三

電話：06-6605-2113、メールアドレス：uemura@ado.osaka-cu.ac.jp

《添付資料》

- 一、東京大學出版會刊『保古飛呂比』(1978年)明治14年9月29日条(コピー)
- 二、国立公文書館所蔵「開拓使官有物払下許可及び取り消しの件」(コピー)

以上

(注) 同一趣旨の文書を高校日本史教科書刊行の清水書院・実教出版・第一学習社・明成社・山川出版社の各社長宛および岩波書店社長宛・歴史学研究会事務局長宛にも送っている。

2022年3月3日

五代友厚の真実の姿を広く知ってもらう活動についてのご報告

大阪市立大学同窓会 五代友厚記念事業委員会
委員長 児玉隆夫

2020年9月に当同窓会出版企画・八木孝昌著の『新・五代友厚伝』（PHP研究所）が刊行され、そこにおいて明治14年の開拓使官有物払い下げ事件が詳説され、同事件における五代の無実が論じられました。これを受けて、2021年3月15日に初等中等教育局神山弘教科書課長（当時）を荒川哲男大阪市立大学学長他がお訪ねし、本学開学の祖五代友厚が諸高等学校日本史教科書において「開拓使官有物払い下げを不当な安値で受けようとした政商」という事実に相違する記述をされている件についてご相談いたしました。その際、五代友厚の真実の姿を広く知ってもらう活動の重要性についてご示唆をいただきましたので、この間に取り組んできた活動についてご報告申し上げます。

一、「五代友厚官有物払い下げ説見直しを求める会」の発足と署名活動

2021年11月3日に「五代友厚官有物払い下げ説見直しを求める会」を大阪市立大学内に発足させ、「開拓使官有物が政商五代に払い下げられようとした」とする諸高校日本史教科書の記述が事実に相違することを社会的認知として掲げるために署名活動を行って7000余の賛同を得ました。

二、各高校日本史教科書会社・岩波書店・歴史学研究会への要望

2021年12月から翌年1月かけて、高校日本史教科書会社6社と『日本史年表』を刊行する岩波書店、『日本史年表』を編纂する歴史学研究会に要望書を送り、政府が決定した官有物払い下げ先は開拓使幹部4人が設立する予定の民間会社であったことを証する国立公文書館所蔵史料「開拓使官有物払下許可及び取り消しの件」のコピーを添えて五代についての記述の見直しを求めました。これについては教科書会社4社・岩波書店・歴史学研究会から「指摘事項は検討する」との返事をいただきました。

三、「五代友厚シンポジウム」の開催

2022年1月22日に大阪市立大学で当同窓会・大阪市立大学共催の「五代友厚シンポジウム——開拓使官有物払い下げ説を問う」を開催し、払い下げ問題の包括的な検討を行いました。基調報告を行った住友史料館末岡照啓研究顧問は佐佐木高行日記『保古飛呂比』（東京大學出版會）に記録された「黒田開拓長官からの払い下げ要請を五代友厚が断った」とする記述の発見を報告し、五代無実のさらに新しい証拠の発見として大きな反響を呼びました。

四、各高校日本史教科書会社・岩波書店・歴史学研究会への第二次要望

2022年2月、「五代友厚シンポジウム」の成果を受けて、上記各社および歴史学研究会に第二次要望書を送り、佐佐木高行日記『保古飛呂比』（東京大學出版會）該当箇所のコピーを添えて、五代記述の見直しを再度要望しました。

添付資料：1）国立公文書館所蔵史料「開拓使官有物払下許可及び取り消しの件」コピー

2）「教科書記述見直しに関する第一次要望書」

3）「五代友厚シンポジウム報告書」

4）佐佐木高行日記『保古飛呂比』（東京大學出版會）コピー

5）「教科書記述見直しに関する第二次要望書」

6）「開拓使官有物払い下げ事件」に関する高等学校日本史教科書の記述

以上

文部科学省 御中

件名： 「五代友厚に官有物払い下げ」とする教科書記述の修正に関する要望

要望の要旨：

現行諸高等学校日本史教科書（第一学習社、三省堂、東京書籍、実教出版、山川出版社、清水書院他）は明治14年の政変に関連する開拓使官有物払い下げ問題について、「開拓使の廃止を前に、長官の黒田清隆が同じ薩摩出身の政商五代友厚に、約2000万円を投じた事業を38万円という不当に安い価格で払い下げようとして問題になった」という趣旨の記述を行っている（例示記述は清水書院、平成29年3月7日 文部科学省検定済、令和2年2月15日 第三版発行の『高等学校日本史B新訂版』）。

しかし、これは明治14年7月26日の「東京横浜毎日新聞」社説の誤報を元としている。明治政府が決定した官有物払い下げ先は、開拓使の安田定則ら上級官吏4人が退職して設立しようとした民間会社であった。このことには以下の3点の証拠資料がある。

1. 開拓使官有物を安田定則以下四人の開拓使官吏が職を辞して設立する民間会社に払い下げることを提案した明治14年7月21日付開拓長官黒田清隆の三条実美太政大臣宛「工場其他払下処分儀に付伺」。および同「伺」を「聞き届けた」ことを示す明治14年8月1日付政府文書（いずれも国立公文書館所蔵）。
2. 明治14年7月26日「東京横浜毎日新聞」社説が誤報であり、官有物払い下げ先は開拓使の官吏が「官職を辞して」設立しようとした民間会社であることを報じた明治14年8月5日「朝野新聞」論説（国会図書館所蔵）。
3. 開拓長官黒田清隆の三条実美太政大臣宛政府文書「工場其他払下処分儀に付伺」を掲載し、官有物払い下げ先が安田定則以下四人の開拓使官吏が職を辞して設立する民間会社であることを報じた明治14年9月5日付「郵便報知新聞」。および明治14年9月6日・7日付「朝野新聞」（いずれも国会図書館所蔵）。

以上によって、諸高等学校日本史教科書における上記のような記述は史実に相違することが明白であるので、当該記述の修正を要望する。

要望事項：

上記「要旨」の通り、諸高等学校日本史教科書は明治14年の政変に関連する開拓使官有物払い下げ問題について史実に反する記述をしているので、次回教科書検定の機会に貴省は史実に基づいた記述に修正するよう該当教科書会社にご指導いただくよう要望します。

請願者 五代友厚官有物払下げ説見直しを求める会

代表 児玉 隆夫

賛同署名簿

氏名	住所

※署名は自署にて、住所は都道府県からご記入ください。※「同上」は無効になります。

※ご記入いただいた署名は、文科省提出の添付以外の用途には一切使用いたしません。

請願書送付先：558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

大阪市立大学 田中記念館 3階

大阪市立大学同窓会事務局

TEL：06-6605-2113 FAX：06-6605-2088

E-Mail：uemura@ado.osaka-cu.ac.jp

編集後記

2018年1月に私は児玉隆夫大阪市立大学同窓会長より同同窓会が企画する開学の祖五代友厚の伝記の執筆を依頼された。2020年9月に『新・五代友厚伝』がPHP研究所から出版された。2022年1月22日に大阪市立大学内田中記念館ホールにおいて「五代友厚シンポジウム」が開催された。この4年間は一直線の道のりであったように見える。

児玉会長から伝えられた五代伝刊行の趣旨は、「これまで世に出たいくつもの五代友厚伝記は『五代政商説』を克服できていない。五代友厚の正しい姿を多くの方々に知ってもらい、それを後世に伝えるために、事実即した五代友厚を書いてもらいたい」であった。さいわいにも先行する末岡照啓氏の論文『「開拓使官有物払い下げ事件」再考』（「住友史料館報」第41号、2010年）が開拓使官有物払い下げ事件における五代の無実を初めて明らかにしていることを知って、その先行研究を活用させてもらえば、五代伝の中心のテーマは執筆可能となる見通しが立った。また調査の結果、従来の五代友厚伝には数々の伝記的な誤謬があることが判明し、誤りを正すための資料を入手することができた。

このようにして『新・五代友厚伝』が出版されたとき、自然な流れとして、開学の祖五代友厚が開拓使官有物払い下げ事件で悪徳商人のようにして破格の安値で官有物の払い下げを受けようとしたとする高校日本史教科書や日本史年表・日本史事典などの記述を放置しておいてよいのか、という気運が起こった。2021年11月に「五代友厚官有物払い下げ説見直しを求める会（代表児玉隆夫）」が結成された。この会は、教科書を検定する文部科学省への要望書に署名を求める活動や各日本史教科書会社・『日本史年表』刊行の岩波書店・『日本史年表』編纂の歴史学研究会への記述見直しの要望書を送る活動を進めた。要望書には五代無実の根拠となる国立公文書館所蔵資料の写しと五代無実説をとる近年の歴史書文献のリストが添付された。

そして、「五代友厚シンポジウム」が開催された。これは2018年1月に始まる五代友厚再評価活動の集約点であった。基調報告を担当した住友史料館の末岡照啓氏は本年7月にミネルヴァ書房から上梓する予定の『五代友厚と北海道開拓使事件——明治十四年の大隈追放と五代攻撃の謎に迫る』の内容を踏まえ、新たに発見した五代無実の決定的証拠を披露するとともに、包括的な五代無実の論証を行った。続く八木孝昌の報告は、五代悪徳商人説をとる近代日本史研究者の頑迷な思考構造を「二段構え」として明らかにした。そして五代の地元鹿児島から迎えた原口泉教授からは、歴史研究におけるエビデンスの重要性が強調された。それは開拓使官有物事件の五代についてエビデンスよりも心情に傾いたところで評価してきた歴史学の状況についての戒めでもあった。

本冊子はシンポジウムの記録を第Ⅰ部に収録し、第Ⅱ部には資料編として文部科学省への署名簿や各教科書会社・岩波書店・歴史学研究会への要望書を収録した。この冊子が五代名誉回復活動をさらに押し進めることを願っている。

最後になるが、本シンポジウムにメッセージを寄せていただいたディーン・フジオカ氏とシンポジウムの成功を支えていただいた各位に衷心の感謝を申しあげる。（八木孝昌）

《追記》本年6月の来年度用教科書見本市に展示された清水書院『日本史探求』は、「開拓使官有物払い下げ事件」について、開拓長官黒田清隆は「38万円という不当に安い価格で同じ薩摩藩出身の政商五代友厚の経営する『関西貿易社』に払い下げようとしている」と新聞が報じて問題化した」と記述している。ここで「と新聞が報じて問題化した」と書かれている部分は、従来は「政商五代に払い下げをしようとして問題化した」と書かれていたものである。事実と反する記述から事実に基づく記述へと変更された意義は限りなく大きい。これは「五代払い下げ説見直しを求める会」が行ってきたこの間の活動の成果である。

五代友厚記念事業委員会活動報告（2018年～）

五代友厚記念事業委員会は、「五代友厚銅像建立記念誌」の刊行を機に発足しました。

1) 五代友厚記念事業プロジェクト寄付募金活動（2018年6月～2020年7月）

※記念事業として ①『新・五代友厚伝』刊行 ②寄付講座「国際ビジネス演習」開設

③海外インターンシップ実施 ④五代友厚展示コーナー設置

2) 「北海道開拓使払い下げ事件」の見直しを求めるための活動：

①八木孝昌著「新・五代友厚伝」（PHP研究所）の発刊（2020年8月）

八木孝昌著「五代友厚伝小伝」の発刊（2021年2月）

②五代友厚シンポジウム（2022年1月）

③署名活動・教科書出版会社への申し入れ

教科書記述見直しを要望する署名活動（2021年11月～2022年2月）

教科書出版会社・学会等への申し入れ（2021年12月～2022年3月）

④文部科学省への報告（2022年3月）

3) 五代友厚のキャンペーン活動： ※2020年～2021年はコロナ禍で休止

①「五代友厚と音楽の集い」（在学生との共催、2018年11月）

②「五代友厚と市民の集い」（大阪あそ歩委員会との共催、2019年11月）

③『新・五代友厚伝』出版記念碑建立披露式典（2020年9月）

④「五代友厚と桜まつり」（大阪造幣局の協力、2022年3月）

4) 五代友厚記念事業として大学並びに在学生への支援活動：

①五代寄付講座「国際ビジネス演習」の開設（2018年4月～）

②海外インターンシップの実施（2018年8月～）

※2020年～2022年はコロナ禍で休止

ラストイチャダイ 五代友厚シンポジウム報告集 —開拓使官有物払い下げ説を問う—

発行日／令和4年(2022)7月2日

発行／大阪市立大学同窓会 五代友厚記念事業委員会

編集／五代友厚シンポジウム編集委員会

印刷・製本／株式会社 日本プリンティング



大阪市立大学同窓会
五代友厚記念事業委員会